

よう来ちゃったなあ〜/

播磨の奥座敷

多可

歴史と文化を訪ねて



播磨の奥座敷 多可 歴史と文化を訪ねて

項 目	P
目 次	2
細目次・解説	3~4
多可町概要	5
多可町地図	6
多可のコラム	7



中区概要	8
中区地図	9~10
中区項目	11~25



加美区概要	26
加美区地図	27~28
加美区項目	29~45



八千代区概要	46
八千代区地図	47~48
八千代区項目	49~61

細目次

番号・項目(内容)	P
表紙	1
目次	2
細目次・解説	3~4
多可町概要	5
多可町地図	6
多可のコラム	
あまんじゃこー「大人」の末裔ー	7
中区概要	8
中区地図	9~10
1 瑞光寺(門前)	11
2 正福寺(東山)	11
3 清水寺(田野口)	11
4 量興寺(天田)	11
5 浄福寺(高岸)	12
6 観音寺(奥中)	12
7 鳳凰寺(安坂)	12
8 鳳泉寺(坂本)	12
9 崇福寺(曾我井)	13
10 円満寺(西安田)	13
11 法幢寺(中安田)	13
12 善光寺(東安田)	13
ちよつと一息	
正月行事-ハナフリ・キツネガリ-	14
13 八幡神社(門前)	15
14 荒田神社(安楽田)	15
15 大年神社(東山)	15
16 名越神社(田野口)	15
17 八幡神社(牧野)	16
18 大歳金刀比羅神社(鍛冶屋)	16
19 恵比須神社(間子)	16
20 加都良神社(間子)	16
21 秋葉神社(岸上)	17
22 御許神社(岸上)	17
23 加都良神社(岸上)	17
24 加都良神社(天田)	17
25 大歳神社(高岸)	18
26 藤塚神社(高岸)	18
27 大姫山天神社(奥中)	18
28 熊野神社(奥中)	18

29 天神社(徳畑)	19
30 大歳神社(茂利)	19
31 祇園神社・恵比須神社(中村町)	19
32 稻荷神社(糺屋)	19
33 日吉神社(森本)	20
34 稻荷神社(中安田)	20
35 一里塚(岸上)	20
36 段の城(門前)	20
37 貝野城(東山)	21
38 森本城(森本)	21
39 東山古墳群(東山)	21
40 銅製錬所跡展示館(牧野)	21
41 新富山古墳群(奥中)	22
42 間子の七不思議(間子)	22
43 奥中の長石(奥中)	22
44 金の鶏伝説(曾我井)	22
45 山田勢三郎(東安田)	23
46 那珂ふれあい館(東山)	23
47 妙見山(東山)	23
48 牧野大池(牧野)	23
49 鍛冶屋線記念館(鍛冶屋)	24
50 播州歌舞伎モニュメント(岸上)	24
51 松内ミネルココレクション博物館(中村町)	24
52 武嶋山(東安田)	24
ちよつと一息 お地藏さま	25
加美区概要	26
加美区地図	27~28
1 雲門寺(清水)	29
2 奥山地蔵堂(清水)	29
3 虚空蔵堂(轟)	29
4 慈眼寺(山口)	29
5 観音堂(西山)	30
6 専浄寺(市原)	30
7 日光寺文殊堂(丹治)	30
8 浄居寺(門村)	30
9 西教寺(杉原)	31
10 浄照寺(奥豊部)	31
11 観音寺(観音寺)	31
12 極楽寺(豊部)	31

13 阿弥陀寺(熊野部)	32
14 神光寺(岩座神)	32
15 諦願寺(多田)	32
16 林松寺(多田)	32
17 金蔵寺(的場)	33
18 西光寺(西脇)	33
19 常楽寺(山野部)	33
ちよつと一息	
夏の行事 一水と火の祭りー	34
20 青玉神社(山寄上)	35
21 青玉神社(鳥羽)	35
22 西宮神社(清水)	35
23 河上神社(轟)	36
24 熊野神社(市原)	36
25 大歳神社(三谷)	36
26 大歳神社(箸荷)	36
27 厳島神社(門村)	37
28 青倉神社(観音寺)	37
29 大歳神社(観音寺)	37
30 五社神社(豊部)	37
31 稻荷神社(熊野部)	38
32 五霊神社(岩座神)	38
33 広峰神社(棚釜)	38
34 春日神社(多田)	38
35 若宮神社(奥荒田)	39
36 天目一神社(的場)	39
37 二宮荒田神社(的場)	39
38 川裾神社(寺内)	40
39 大歳神社(山野部)	40
40 宝篋印塔(箸荷)	40
41 枝の地藏(寺内)	40
42 門村構居(門村)	41
43 奥豊部古墳群(奥豊部)	41
44 岩座神の七不思議(岩座神)	41
45 山口茂吉(清水)	42
46 森安小春(市原)	42
47 杉原兵太夫安久(杉原)	42
48 藤田平右衛門(観音寺)	42
49 夏梅太郎右衛門(熊野部)	43
50 戸田春次郎(多田)	43

51 壽岳文庫(鳥羽)	43
52 杉原紙研究所(鳥羽)	43
53 梅花藻(大袋)	44
54 千ヶ峰(三谷)	44
55 松か井の水(奥荒田)	44
56 新松か井の水(奥荒田)	44
ちよつと一息	
多可町の鉱山 一月治の地名由来ー	45
八千代区概要	46
八千代区地図	47~48
1 安海寺(中村)	49
2 観音堂(赤坂)	49
3 極楽寺(中野間)	50
4 楊柳寺(柳山寺)	50
5 阿弥陀堂(中三原)	51
6 毘沙門堂(上三原)	51
ちよつと一息	
秋祭り-リオンリオン・オトウ-	52
7 鹿子神社(大屋)	53
8 貴船神社(中村)	53
9 大歳神社(横屋)	53
10 金毘羅神社(下村)	54
11 神明神社(門田)	54
12 太神宮社(俵田)	54
13 川下神社(中野間)	54
14 貴船神社(中野間)	55
15 天満神社(仕出原)	55
16 貴船神社(下野間)	55
17 貴船神社(下三原)	56
18 愛宕山神社(柳山寺)	56
19 大歳神社(柳山寺)	56
20 大歳神社(中三原)	56
21 稚児岩(大屋)	57
22 六本地蔵(大屋)	57
23 光竜寺山城(中野間)	57
24 野間山城(中野間・俵田)	58
25 いぼ薬師(中野間)	58
26 市位重兵衛(大屋)	58
27 門脇政夫(中野間)	59

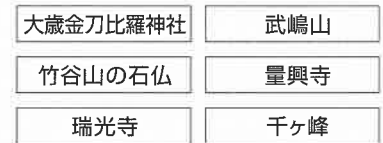
28 笠形山(大屋)	59
29 けけ橋(坂本)	59
30 凍豆腐業発祥の地(門田)	59
31 竹谷山(俵田)	60
32 ホタルの宿路(俵田)	60
33 西谷公園(中三原)	60
ちよつと一息	
雨乞い	61
裏表紙	62

この本の解説

表紙写真



裏表紙写真



項目名の帯色区分

- 寺院
- 神社
- 石造物・道標・記念碑
- 城址・構居
- 古墳・遺跡
- 伝説・伝承
- 人物
- 観光地・観光施設など

中区・加美区・八千代区の順番で帯色区分ごとに行政順で並んでいます。

本文中の項目説明

- 住所
- 電話番号(市外局番は0795)
- 神姫グリーンバス〈神姫バス〉のバス停(のぎくバスのバス停)
- 休館日など その他の情報

天たかく 元気ひろがる 美しいまち 多可町へ おいで～な！

多可町は平成17年11月1日に3町（中町・加美町・八千代町）の合併により誕生した。町の人口は22,952人（平成25年4月1日現在）、東西13km、南北30km、総面積は185km²、直線距離で神戸・姫路から約45km、大阪から約70kmの所に位置する。所要時間は車で神戸や大阪から約80分、姫路からは約60分と比較的都市部に近く、都市農村交流施策の展開には最適地といえる。

兵庫県のほぼ中央に位置し、周囲を中国山地の山々に囲まれた多自然居住の魅力あふれる町。四季折々の自然風景を満喫できる場所でもある。町のシンボルともいえるべき三山（妙見山、千ヶ峰、笠形山）は美しく、身近に自然を体感できる山として重要な観光資源となっており、春は桜、秋には紅葉、南北に流れる杉原川やその支流では、初夏にはホタルが舞う幻想的な風景が楽しめる。

これら自然を生かした体験施設の充実に加え、多可町の自然農法で育てられたお米や野菜、播州百日鶏・シカ肉の加工品、山田錦のお酒、播州ラーメンなどの特産品があり、おふくろの味の定番「巻き寿司」は多可町の代表商品となっており、道の駅やまちの駅、直売所などで販売されている。

多可町の特性は、酒米の最高峰「山田錦」、日本一の手すき和紙「杉原紙」、国民の祝日「敬老の日」と全国的に知名度のある3つの発祥の町に見ることができる。

また、伝統文化として子どもたちに継承している播州歌舞伎などの文化的遺産があり、歴史街道モデル地区として至るところにある神社仏閣で歴史の奥深さを見ることができる。

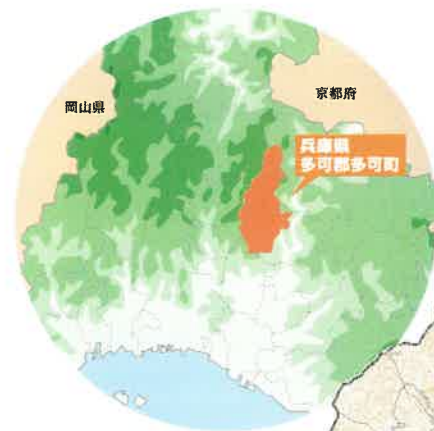
古く奈良時代に編まれた播磨国風土記に登場する大人（おおひと）の記載があり、そこから生まれた「あまんじゃこ（天邪鬼）」の伝説が残っている。千ヶ峰から天に向かって石を積み上げようとして夜が明けたため残された「塔の石」や、妙見山と笠形山に巨大架け橋をかけようとして残した「忘れ石」、あまんじゃこが山を持ちあげようとして折れてしまった「長石」が今も残されている。

いたずら好きのあまんじゃこが人々に親しまれているのは、「多可郡」の名付け親というだけでなく、憎めないキャラクターと由緒の深さである。全国各地に大男伝説はあっても、当地のあまんじゃこは別格で、これからも多可町各地で語り継がれ、子どもたちに夢を与える楽しい物語が創られていくことであらう。



多可町のマスコットキャラクター「たか坊」

多可町地図



あまんじゃこ - 「大人」の末裔 -

多可町域が属する、「播磨国風土記」の「託賀郡(たかのこおり)」。その郡名は、いつも背をかがめて歩いていた巨人「大人(おおひと)」に由来する。この地にやってきた「大人」は、初めて背を伸ばして歩き「天が高い」と喜んだとか。その足跡は沼になったそうだ。

ところで、関東の巨人伝説として有名なのが「だいだらぼっち」。民俗学者の柳田國男は、「大人」を意味する「大太郎(だいたろう)」に「法師」が付いて「だいだらぼっち」になったと説いている。多可町には、「大人」の子孫と思われるあまんじゃこ伝説がいくつも残っている。あまんじゃこは、お寺で四天王や仁王さんに踏みつけられている悪鬼の名前、「天邪鬼(あまのじゃく)」から来た呼び名だろう。多可町をはじめとする播磨各地の伝説では、愛すべき巨人として活躍することが多い。



笠形山山頂付近にある立岩

さて、多可町のあまんじゃこは、あるとき妙見山から西の笠形山に橋を架けようとしたという。夜のうちに石を積み、土台を完成させたところで夜が明けてしまった。笠形山山頂直下にある「立岩」と妙見山中腹にある「忘れ石」は、そのとき未完成に終わった橋の土台だとか。千ヶ峰にある奇石「塔の石」にも、あまんじゃこが天に向かって石を積み上げようとしたが、夜が明けたのであきらめたという伝承がある。あまんじゃこが夜明けとともに断念したのは、それだけではない。あると

き、あまんじゃこは笠形山の岩を砕いて、その岩を加美区、八千代区と引きずって歩いた。中区糶屋で夜が明けて、逃げていったそうだ。また、かつて多可町域で行われていたタマツリ(田祭り)には、こんな伝承がある。ある夜、あまんじゃこは加美区、八千代区と田んぼに供え物をしながら歩いてきたが、中区の曾我井で夜が明けてしまった。だから、曾我井から南ではタマツリをしない。豊作を祈るタマツリとの結びつき、そこには神としての姿が見え隠れしている。あまんじゃこが夜の闇の中で活躍する姿は、人の目には見えない日本古来の神のイメージとも重なるだろう。

中区にある「奥中の長石」は、二つの山を運ぼうとしたあまんじゃこが担い棒に使ったと伝えられる。山の重さに耐えきれず石の棒は二つに折れてしまい、山は落ちた場所に今もあるのだとか。二つの山の成り立ちを語る話だ。足跡が沼になった風土記の「大人」には、大地を創造する神の面影がある。末裔のあまんじゃこも、その血を引いているのだろう。妙見山麓の東山古墳群はあまんじゃこと火の雨をめぐる伝承を持つが、円墳が散らばる不思議な光景が人知を越えた神々の技を想像させたのではないだろうか。数々のあまんじゃこ伝説から生まれた、多可町のキャラクター「たか坊」。多可町の歴史を未来の子どもたちにつなぐ架け橋として、大いに活躍してほしい。



奥中の長石

多可町中区



酒米の最高峰「山田錦」と妙見富士と呼ばれる秀峰「妙見山」

酒米の最高峰「山田錦」発祥の地

多可町は日本一の酒造好適米「山田錦」発祥の地で、山田錦の母方「山田穂」を発見したのは中区東安田の豪農「山田勢三郎翁」である。山田錦が誕生してから70年を迎えた平成18年3月5日には、地方自治体として全国で初めて「日本酒で乾杯の町」を宣言し、「酒米・山田錦」が生まれた自然と文化を尊び、日本文化に深い関わりを持ってきた日本酒をこよなく愛することを高らかにアピールした。

また、山田錦発祥の地をテーマに、平成5年から毎年10月1日(日本酒の日)には歌手加藤登紀子さんを招き「日本酒の日コンサート」を開催したり、日本酒の川柳を全国公募したりと、日本酒を通じた町づくりを行っている。1000本限定販売される「登紀子ブランド酒」には登紀子さん命名の直筆ラベル(杉原紙)が貼られ、包装紙には登紀子の田んぼで田植えされた方の名前が入る。

現在も山田錦栽培に取り組む農家は多く、多可町で収穫された高品質の山田錦は、全国各地の酒造元へ出荷される。山田錦からできたお酒は高級酒が多く、香り高く芳醇な味わいが特徴で、多くの人に愛されている。

中区地区

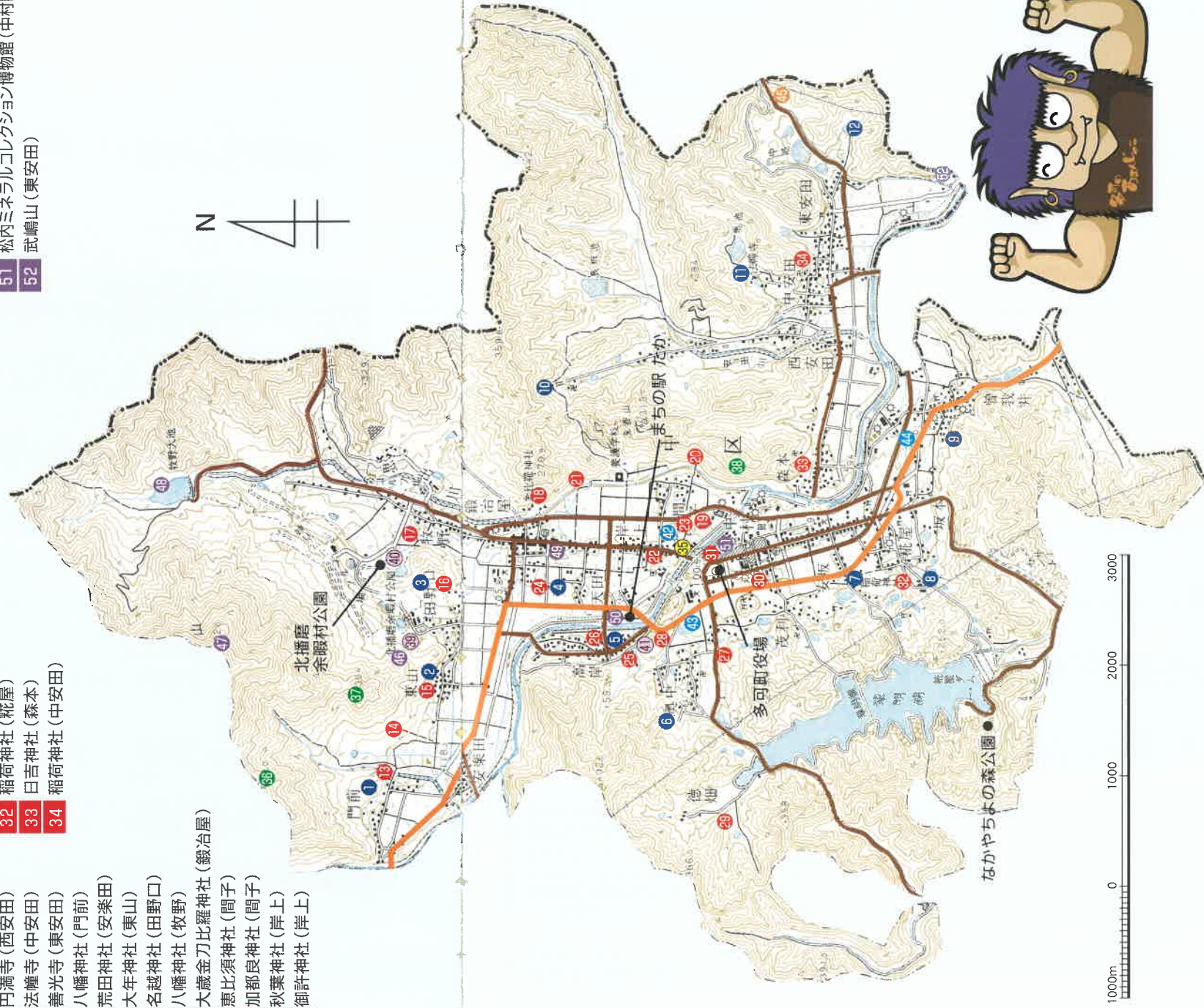
- 1 瑞光寺 (門前)
- 2 正福寺 (東山)
- 3 清水寺 (田野口)
- 4 量興寺 (天田)
- 5 浄福寺 (高岸)
- 6 観音寺 (奥中)
- 7 鳳凰寺 (安坂)
- 8 鳳泉寺 (坂本)
- 9 崇福寺 (曾我井)
- 10 円満寺 (西安田)
- 11 法幢寺 (中安田)
- 12 善光寺 (東安田)
- 13 八幡神社 (門前)
- 14 荒田神社 (安楽田)
- 15 大年神社 (東山)
- 16 名越神社 (田野口)
- 17 八幡神社 (牧野)
- 18 大蔵金刀比羅神社 (鍛冶屋)
- 19 恵比須神社 (間子)
- 20 加都良神社 (間子)
- 21 秋葉神社 (岸上)
- 22 御許神社 (岸上)

- 23 加都良神社 (岸上)
- 24 加都良神社 (天田)
- 25 大歳神社 (高岸)
- 26 藤塚神社 (高岸)
- 27 大姫山天神社 (奥中)
- 28 熊野神社 (奥中)
- 29 天神社 (徳畑)
- 30 大歳神社 (茂利)
- 31 祇園神社・恵比須神社 (中村町)
- 32 稲荷神社 (靴屋)
- 33 日吉神社 (森本)
- 34 稲荷神社 (中安田)

- 35 一里塚 (岸上)
- 36 段の城 (門前)
- 37 貝野城 (東山)
- 38 森本城 (森本)
- 39 東山古墳群 (東山)
- 40 銅鑿鍊所跡展示館 (牧野)
- 41 新宮山古墳群 (奥中)

- 42 間子の七不思議 (間子)
- 43 奥中の長石 (奥中)
- 44 金の鶏伝説 (曾我井)
- 45 山田勢三郎 (東安田)
- 46 那珂ふれあい館 (東山)
- 47 妙見山 (東山)
- 48 牧野大池 (牧野)
- 49 鍛冶屋縁記念館 (鍛冶屋)
- 50 播州歌舞伎モニュメント (岸上)
- 51 松内ミナラルコレクション博物館 (中村町)
- 52 武嶋山 (東安田)

9



1 | ずいこうじ
瑞光寺




🏠 中区門前
313

📍 門前
(瑞光寺前)

臨済宗天龍寺派
集雲山瑞光寺と称し、元弘2年(1332)、赤松則祐が母の菩提を祀るために、夢窓国師を招請して建立したと伝えられる古刹。一時衰退したが、夢窓国師の十世の法孫、文礼周郁禪師が当地に入り、伽藍を再建、諸堂を整え、寺運は再び栄えた。
参道の竜宮門を一歩くぐると、禅宗様式を残す庭園などがひろがり、17世紀後半ごろの数少ない禅宗寺院である。

2 | しょうふくじ
正福寺



🏠 中区東山
446

☎ 32-2339

📍 東山
(東山中)

浄土真宗本願寺派
宝池山正福寺と称し、ご本尊は阿彌陀如来。創立は永仁2年(1294)3月、正宝という僧侶が寄せ棟の道場を建立したのが始まりとされている。一時無住になっていたが応永元年(1394)、南呂吉丹法師が大いに人々の信仰を集めて、寺門はめざましく興隆したと伝えられる。2m余の親鸞聖人御像と大銀杏、更に厳かな阿彌陀如来像の尊顔を拝することができる。

5 | しょうふくじ
浄福寺



🏠 中区高岸
302

☎ 32-2115

📍 中央公園前
(高岸消防庫前)

浄土真宗本願寺派
高田山浄福寺と称し、本尊は阿彌陀如来である。寺伝によれば、文明12年(1480)3月、京都より僧法賢師がやってきて当地に道場を開き、村人に仏法を説いたのを開基としている。本尊阿彌陀如来像は「安阿弥様」様式を受け継ぐ尊像。本堂には、江戸中期の親鸞聖人絵伝や蓮如上人直筆とされる「六字名号」が保存されている。

6 | かのんじ
観音寺



🏠 中区奥中
962

☎ 32-3303

📍 中央公民館前
(奥中西)

高野山真言宗
福王山観音寺と称し、寺伝によれば第45代聖武天皇の神亀2年(725)、行基の開基と伝えられている。本尊は十一面観音像。境内の「日限地蔵(ひぎりじぞう)」は、日を限って一心に拝すれば所願が叶えられるという。また境内には旧郡役所の門柱なども保存されているほか、多可町最古の文学碑とされる「石除暗遍明」と刻まれた石灯籠があり、「(散りて行く花に方便(かたず)はなかり鼻(けり) 霧雲晴れて有明の月) 安政3年辰霜月造玄 権大僧都 憲賀」と刻まれている。春には裏山のコノハツツジが美しく咲く。

3 | せいすいじ
清水寺



🏠 中区田野口

📍 中町北小学校
(田野口)

臨済宗天龍寺派
梅峯山清水寺と称し、元弘2年(1332)、夢窓国師とも、応永年間(1394~1428)、瑞光寺八世足谿周麟の草創とも伝えられるが、明らかではない。その後元禄年間(1688~1704)、瑞光寺の文礼和尚によって再興された。本尊聖観音立像は、平安時代後期の作で、昔日、火災の際、難を避けて現在の地に飛来してきたので「火除け観音」としても崇められている。かつて堂裏に「いやしの名水」と呼ばれる清水があり、名前の由来になったと考えられる。秋になると参道には萩の花が咲き乱れる。

4 | りょうこうじ
量興寺



🏠 中区天田
160

☎ 32-2301

📍 鍛冶屋(天田)

高野山真言宗
高寺山量興寺、古くは「多哥寺」と称し、第33代推古天皇(593~628)の御願所として創建されたと伝えられており、今も雄大な多重塔の心礎が現存し、往時の壮観を偲ぶことができる。天正6年(1578)、地頭矢田部越中守長久が本堂を再建し、良遍上人を招いて中興開山、古名を取って「高寺山量興寺」と称している。天福2年(1234)の「地頭代官仲原某氏燈油田寄付文書」や中世期の寺領図、系図が保存されている。

7 | ほうおうじ
鳳凰寺



🏠 中区安坂
499

☎ 32-0026

📍 安坂(安坂西)

天台宗比叡山延暦寺派
永坂山鳳凰寺と称し第36代孝徳天皇の白雉元年(650)、法道仙人の草創と伝えられている。古くは糺屋新田宇長坂山にあったが、天正年間(1573~1592)に兵火を被り、堂塔伽藍を悉く消失するも逃れて、この地に来て小堂を建立し法灯を継いだとされる。貞享年間(1684~1688)に法性院円遵和尚が来られて再興し、享保10年(1725)、小銅鐘を鑄造し、面目を改めた。長坂山を改めて永坂山と称された。ご本尊は十一面観世音菩薩で、大日如来像も安置されている。

8 | ほうせんじ
鳳泉寺



🏠 中区坂本
380

📍 糺屋(多可町図書館)

📍 問合せは
坂本区長へ

臨済宗妙心寺派
瑞雲山鳳泉寺と称し、第36代孝徳天皇白雉元年(650)、法道仙人の開基と伝えられる。本尊は聖観世音菩薩で、昭和50年3月に県指定文化財に指定されている。像容は、穏やかな伏し目の面相を持ち、両脚下の衣紋に翻波式(ほんばしき)の名残りを残すなど、地方作としては見応えのある彫技を示し、制作期は平安時代中期頃(11世紀初頭)と推定される。

正月行事 - ハナフリ・キツネガリ -

日本は四季折々に応じた祭りや伝統行事があり、正月行事も多彩だ。多可町にも、さまざまな正月行事が受け継がれている。町全体に色濃く残る「オトウ(御当・御禱などと表記)」は、正月にその引き継ぎ、「オトウ渡し」を行うところが少なくない。箸荷の「百手祭り」など、弓射神事もいくつか残っている。中区鍛冶屋の大歳金刀比羅神社では、大晦日に町指定民俗文化財「スズメノモン」を行う。雀をもてなして稲の害を防ぐ意味を持つともいう珍しい行事で、これも正月行事のひとつに数えられる。

ここでは、町内で見られる正月行事、ハナフリ(花振り)とキツネガリ(狐狩り)を紹介したい。ハナフリは稲の豊かな実りを祈る年頭の民俗行事で、八千代区下三原の「雨散散(ゆうわらわら、うばらばら)」もそのひとつ。元旦の早朝に櫛の小枝を振りながら唱える言葉が、行事名となった。さて、中区天田の氏神、加都良神社でも元旦にハナフリが行われる。同社は古代寺院の系譜を引く量興寺に隣接する神社だが、ハナフリ



ハナフリ(天田)

の舞台は摂社の八柱神社だ。氏子たちは葉付き大根に櫛を組み合わせた「花の木」を手に持ち、五穀豊穡を願う唱え事をしながら社殿を叩く。大地の霊を揺り起こして、その恵みを願うのだろう。

同地区では、小正月の代表的な民俗行事、キツネガリも継承されている。「キツネガエリ」と呼ばれ、小学生から中学1年生までの男の子が主役だ。量興寺の住職が祈祷した御幣を、唱え事をしながら村境に挿して歩く。

中区間子の加都良神社では、同様の行事を「キツネ追い」と呼ぶ。1月14日に近い土曜日の夕方、神社前の川原でトンドを行った後、幼稚園から中学1年生までの男の子が「ゴーカレ、ゴーカレ」と繰り返しながら村中の家を巡り、家の人から一人一人お金などをもらう。子どもたちの訪問を心待ちにする家々を全て回り終え、神社へ戻るのは夜8時過ぎ。それから、小学校3年生以上の子どもたちが御幣を持って村境を巡る。「オロロヤ、トロロ、ヨーイヨーイ、コドモヨー、オマエリヤソコデナニヤスル、ワカミヤサンニヤトワレテ、キツネ追い、ホーイホイ」と唱えながら。小正月の夜、子どもたちは若宮さんのお使いになる。つまり、神様の名代として村境を回り、村を守る御幣を挿して結界を張って歩くのだ。



キツネ追い(間子)

豊作を願うハナフリと村の安全を祈るキツネガリ、正月行事に込められた人々の想いも一緒に受け継いでいってほしいと思う。

播磨学研究所研究員 埴岡真弓

9 | 崇福寺



崇福寺石塔

- 中区曾我井 231
- 32-0220
- 曾我井

臨濟宗妙心寺派

少林山崇福寺と称し、ご本尊は阿彌陀如来像。慶安3年(1650)、大愚宗築和尚の開山と伝えられている。明治43年(1910)に建立された本堂は、以後数次にわたり増築などが行われたが、老朽化が進み、平成18年3月に全面改築された。境内には、弘安8年(1285)の銘をもつ石層塔があり、塔下出土の仏頭・泥塔とともに県内でも数少ない鎌倉時代の様式を伝えており、石造美術史上貴重なものである。塔は元曾我井字堂ノ本に建立されていたもので、昭和45年に当寺へ移建された。

10 | 円満寺



- 中区 西安田 707
- 32-0312
- 西安田(長野)

高野山真言宗

吉祥山円満寺と称し、大化5年(649)、法道仙人によって開創され、後に弘法大師によって中興されたと伝えられているが、天火によって罹災、慶長14年(1609)、弘法大師の夢告により、古寺復興を志す明覚上人によって、薬師如来を本尊として再建され現在に至る。この明覚上人は姫路城築城の安全と城主池田輝政公の病氣平癒の護摩祈祷を修し、「八天塔」の建立を進言し、その効あって池田公の帰依あつく、「朱印状」を賜る大寺院となる。江戸時代前期作の薬師如来立像図(町指定文化財)をはじめとする多くの寺宝がある。

11 | 法幢寺



- 中区中安田 758
- 32-0574
- 中安田(中安田)

臨濟宗妙心寺派

大雄山法幢寺と称し、本尊は聖観世音菩薩。康永元年(1342)、夢窓国師によって開山され、足利尊氏の建立と伝えられている。寛永11年(1634)、大愚和尚が入山、堂宇を再建され法燈再び輝き渡った。慶安4年(1651)作の梵鐘には大愚禅師の名が刻まれている。当寺は徳川代々の将軍より寺領等が与えられ、寺殿の屋根瓦には「葵」の紋が刻まれており、3代将軍家光の「朱印状」も保存されている。[播磨鑑]には大雄山十景が記され、「宿籠池」などの記事が記されている。大愚宗築像図など絵画6点が町指定文化財にもなっている。

12 | 善光寺



- 中区 東安田 713
- 中安田(東安田公民館)

臨濟宗妙心寺派

医王山善光寺と称し「大鳳凰山」と称える古刹であった。薬師堂に、平安時代後期の巨大な本尊薬師如来像と日光・月光の両菩薩が安置されている。天正年間(1573~1592)、丹波の明智光秀に攻められて兵火にあい、堂宇ごとごとく焼失してしまうが、薬師如来像は背を少し焼いたのみで難を逃れ、その際、業を煮やした光秀が突き刺した「イブキの杖」が芽を吹き、門前の「大イブキ」になったという伝承がある。大イブキは現在、県指定文化財(天然記念物)に指定されている。また本尊の阿彌陀如来立像は、平安時代中期の作で、多可町指定文化財に指定されており、兵庫県立歴史博物館に寄託されている。

13 | はちまんじんじゃ
八幡神社



🏠 中区門前
366
■ 門前
(瑞光寺前)

創建沿革は不明だが、門前の地名からもわかるように古刹瑞光寺前に形成された集落に、その鎮守神として中世期に勧請されたものと考えられる。もともと山嶺地にあったものがこの地に遷座された。祭神は品太和気命(ほんだわけのみこと)。1月18日前後の日曜日に行われる厄神祭礼時には、今も厄年の男女が歳数のお金を境内に撒く「厄祓い」の行事が行われ、氏子の子どもたちがその「厄拾い」をするという風習が続いていることでも知られている。

14 | あらたじんじゃ
荒田神社



🏠 中区
安楽田 982
■ 安楽田(安楽
田天満神社)

同名の神社が加美区にもあり、式内社としては加美区の同名神社を播磨二宮として、その社格を譲っているが、こちらも古社としての風格を備えた佇まいである。慶長年間(1596~1615)には集落東端の位置にあったが、大火で延焼したのを機に、もともと大歳神社の鎮座していたこの地に合祀され、後年こちらを荒田神社と称するようになったと伝えられる。祭神は少名彦命(すくなひこなのみこと)と五百箇盤石命(いほかいわれいしのみこと)。秋季例祭の際に「荒田神楽」(町指定無形文化財)が奉納されることでも知られる。

17 | はちまんじんじゃ
八幡神社



🏠 中区牧野
606
■ 鍛冶屋(余暇
村公園口)

慶長9年(1604)、南の天田集落に住む二郎右衛門による創建で、後年牧野集落の氏神社となったと伝えられる。祭神は品太和気命(ほんだわけのみこと)。毎年1月18日前後の日曜日に行われる厄神祭礼日には多くの人が参拝に訪れる。午前には雅楽「剣の舞」と併せ、厄除け祈禱を受け、お金を境内に撒く「厄祓い」が今も伝統的に行われている。午後には「湯立て神事」もあり、伝統ある祭礼行事として知られる。

18 | おおとしことひらじんじゃ
大歳金刀比羅神社



🏠 中区
鍛冶屋
856-1
■ 鍛冶屋
(鍛冶屋)

創建沿革は不明だが、近世以前の記録からは大歳神社として鎮座していた。寛政6年(1794)、この地域の篤志家でもある藤井孫右衛門が病氣平癒を祈願して四国の琴平宮から勧請し、祭神を合祀したことにより現在の神社名に改称された。祭神は大歳神、大日貴命、保食神、事代主神。11月22、23日を中心に行われる大祭は、かつて「播州三大祭」の一つとされ、当時の鉄路であった鍛冶屋線は臨時列車の増便で10万余の参詣者を集め、賑わった。また、年末年始の歳時儀礼として、「すすめもん」(町指定無形文化財)や「キツネ狩り」という伝統行事が地域のトウ人や子どもたちの手で守り伝えられている。

15 | おおとしじんじゃ
大年神社



🏠 中区東山
550
■ 東山
(東山中)

もともと東山の字太郎兵衛山というところに鎮座していたと伝えられる。太郎兵衛山には小字として「みこし殿」と称する地名も残っており、往時が偲ばれる。明治7年(1874)に現在地に遷座されて現在に至っている。祭神はこの地方に多い大歳神。この神様は五穀豊穡の神様でもあるので、収穫の時期、10月には賑やかに秋祭りが行われる。

16 | なごしじんじゃ
名越神社



🏠 中区田野口
320
■ 中町
北小学校
(田野口)

創建年代は不明であるが、古い検地帳に「除地」扱いの記名があることから17世紀初頭には鎮座していたものと推定される。もともと集落の西南端、「なごせ」「宮の下」とよばれた地に在ったものが現在地に遷座された。杉原川の岸辺で夏越しの大祓いを執り行っていたことからこの神社名になったものと推定される。祭神は表筒男命(うわつつのおのみこと)、中筒男命(なかつつのおのみこと)、底筒男命(そこつつのおのみこと)、市杵嶋姫命(いちきしまひめのみこと)であることから住吉信仰に基づく神社であることも推定される。

19 | えびすじんじゃ
恵比須神社



🏠 中区
間子 84
■ 日赤東

創立年代は不明だが、この地では昔から丹波、但馬地方とを結ぶ要路に近いこともあって、集客が見込まれることから歳末市が定期的に行われていた。神社南の小野原という場所で毎年12月28日に開かれていた「高田市」は正月用品を扱う大きな暮れの市として近年まで賑わっていたと言われている。そのため商売繁盛の神である西宮戎神社を勧請したものとされている。その後、大歳神社、稲荷神社も合祀された。享和元年(1801)の銘がある御神燈が残っているので、少なくともその頃には創立していたのであろう。

20 | かつらじんじゃ
加都良神社



🏠 中区
間子 631-1
■ 日赤東

同名神社が中区北部に集中して3社鎮座するが、この間子地区の神社が式内社とされ、中区唯一の式内社でもある。「勝手大明神」と称されていた時代もあり、沿革の経緯に不明な点も残っている。祭神は加都良之命(かつらのみこと)、高皇産靈命(たかみむすびのみこと)、天忍穂耳命(あめのおしほみのみこと)。神明造りの社殿と共に、拝殿に掲げられている祭礼絵馬も貴重な文化財である。この天保13年(1842)の銘が残る絵馬には多くの神官や太鼓屋台が描かれ、この地域の祭の特色である布団太鼓が賑わうようになった頃の記録絵としても珍しいものである。

21

あきばじんじや
秋葉神社

🏠 中区岸上
689-2

■ 岸上

近世末期に安平重太郎という篤志家が静岡から勧請したものが鎮座の元とされる。祭神は健御名方命(たけみなかたのみこと)、品太和氣命(ほんだわけのみこと)、保食命(うけもちのみこと)、国底立命(くにそこたちのみこと)、火之迦具土命(ひのかぐつちのみこと)、幸魂奇命(さきたまきのみこと)、事代主命(ことしろぬしのみこと)。秋葉さんと言えば火除け火伏せの神として知られるが、この地域の鉱山との結び付きも強く、拝殿に至る階段には寄贈者の名として、牧野入角鉱山鉱長である山田平三郎氏等の銘が残っている。

22

おゆるしじんじや
御許神社

🏠 中区岸上

■ 岸上

創建沿革等不明で、宗教法人としても未登録の小さな祠であるが、地域では「おゆるさん」として親しまれている。この「許し」には次のようないわれが残されている。ここに住む安平氏の前祖が「お伊勢参り」の際、定宿に投宿すると故郷から「親族死すケガれた」と飛脚便が届いた。参拝できない、困ったと悩んでいると、「ゆるす」と書かれた一片の紙切れが舞い降りてきた。これを天の啓示として参拝したというエピソードである。これを機に帰郷後、伊勢神宮の分霊をお祀りして現在に至っているとのことである。

25

おおとしじんじや
大歳神社

🏠 中区
高岸宇茨谷
427-75

■ 中央公園前
(まちの駅たか)

大歳神社名としての創建は新しく、もともと付近に散在していた小社を合祀して明治7年(1874)に社格をもった神社として設立されたのがそのはじまりである。現在、妙見神社、稲荷神社を境内社として有するが、稲荷神社の社殿は江戸期にまで遡ることができるので、古くから神社信仰があったことは推測できる。10月に行われる秋祭りがこの神社の大祭である。古くから奉納相撲も盛んで、「播磨藤」等の地方力士や行司を輩出している伝統もある。

26

ふじつかじんじや
藤塚神社

🏠 中区高岸

■ 高岸北(高岸消防庫前)

宗教法人としては未登録の小社であるが、戦国期三木城落城の後日談がエピソードとして残されている。落城に及び、名のある武将がこの地に逃れ着いたが、力尽き藤の古木の塚室で主従自刃して果てたという言い伝えである。近隣の人々はその哀れを偲び、誰言うとなく「藤塚さん」と称し、お祀りしたものが、現在鳥居なども改築して神社としての体裁になったものである。東隣の閭子集落には「閭子の七不思議」のひとつとして「端午の節句に幟を立てない」というものがあり、敵方の幟を見て自刃したというこの悲劇と共通する言い伝えが残されている。

23

かつらじんじや
加都良神社

🏠 中区岸上
430・431

■ 日赤東

創立時期ははっきりしないが、この地域の「延宝検地帳」にも記載されているので、江戸時代初期には創立していたようである。閭子にある式内社、加都良神社の御旅所とされ、岸上か閭子の西部に位置していたため、「西宮」とも呼ばれていた。かつては両社とも「勝手大明神」と呼ばれていたのだが、明治の初め、加都良神社と改称された。この東北部の川向こうにある秋葉神社の遷座所も境内に設置されている。

24

かつらじんじや
加都良神社

🏠 中区天田
159-1

■ 鍛冶屋
(天田)

創立年代は明らかではないが、地域の「慶長検地帳」や「延宝検地帳」に記載があるので、安土桃山時代の頃には創立されていたものと推定される。「播磨鑑」にも神宮寺としての記載があり、当初は牧野、鍛冶屋、岸上、天田4ヶ村の氏神とも伝えられていたが、明治初期に勝手大明神から加都良神社に改称され、現在は天田1ヶ村の氏神である。式内社、加都良神社から分離したとの説もあるが、根拠は定かでない。この地域にも鍛冶屋と同様「キツネ狩り」の伝統行事が残されている。

27

おおひめやまてんじんじや
大姫山天神社

🏠 中区奥中

■ 中央公民館前
(奥中公民館前)

奥中熊野神社の天神三社を、久安年間に源三位頼政が大姫山に社殿を建て、遷したのが大姫山天神社であると伝えられる。文永4年(1267)2月25日に社殿が炎上し、農夫久兵衛がご神体を奥中の東田に安置し、後に徳畑長尾谷へ遷宮したのが徳畑天神社である。大姫山天神社の境内には、今も往時を偲ぶ礎石が残る。

28

くまのじんじや
熊野神社

🏠 中区奥中
631-1

■ 中央公民館前
(奥中東)

創建沿革は不明だが、中世初期に紀州熊野から勧請したものと伝えられており、南前方の池を「新宮池」と称しているのも、熊野灘を見立てて名付けたものと言われている。祭神は熊野速玉大神(くまのはやたまのおおかみ)、大年神(おおとしのかみ)。この地域を代表する古社である天神社も、もとはここから分祀された社殿が火災に遭い、後年徳畑に移ったものとされている。裏山周辺には古墳もあり、古くからこの地が信仰の対象となっていたことが推測される。

29 | てんじんじや
天神社



🏠 中区徳畑
471-1
■ 中央公民館
前(奥中西)

もともと奥中の大姫山に鎮座していたものが、文永4年(1267)、火災に遭い、後年現在地である長尾谷に遷座したものとされている。祭神は天御中主神(あめのみなかぬしのかみ)、高皇産靈神(たかみむすびのかみ)、神産靈神(かみむすびのかみ)、菅原道真(すがわらのみちざね)。近年、糶屋ダムの完成により周囲の環境は大きく変わったが、中区天神郷で4月下旬に行われる祭礼は、今も盛大に行われている。

30 | おおとしじんじや
大歳神社



🏠 中区茂利 70
■ 中央公民館
前(茂利)

創立年代は明らかでないが、近くの「天神社由来記」には文永年間(1264~1275)に鎮座していた記録がある。「延宝検地帳」の記載や、また寛文8年(1668)の神社棟札が残されており、これによると当時から、茂利村、中村町二集落の氏神だったことが推定される。4月の徳畑天神祭の宵祭には天神郷、奥中・茂利・中村町三集落の屋台(布団太鼓)が奉納される御旅所となっている。拝殿上部蛙股「米俵と太鼠」図の彫り物もユニークである。

31 | ぎおんじんじや えびすじんじや
祇園神社・恵比須神社



🏠 中区中村町
239
■ 多可町役場
(多可町役場)

旧多可郡の中心でもあった中村町には複数の神社が鎮座しており、その代表格がこの二社である。祇園神社の祭神は素戔鳴尊(すさのおのみこと)で、7月の祭礼日にはこの地域を代表する夏祭りとして賑わう。また、恵比須神社は祭神が蛭子神(えびすのかみ)。こちら1月に行われる祭礼の代表格として賑わう。なお、宗教法人としては祇園神社が本社名として登録されており、恵比須神社、稲荷神社、星神社が境内社となっている。

32 | いなりじんじや
稲荷神社



🏠 中区糶屋
434-1
■ 32-0515
■ 糶屋(糶屋
稲荷神社前)

創建は推古天皇2年(594)9月に宇土井後に鎮座と伝えられ、天安元年(857)10月に現社地に遷座。法道仙人開祖とされる延命寺と並立した神仏習合の時代がある。ご祭神は稲彥魂命(うかのみたまのみこと)など。氏子は稲荷郷、安坂・糶屋・坂本・曾我井・森本の五集落。姫路城主池田輝政公の社領寄進、城主本多家に嫁いだ天樹院千姫の安産祈願成就による寄進などがあったが、当時の社堂は現存していない。しかし歴代將軍の朱印状等が今も残されている。赤穂藩領が近くにあって関係で、大石内蔵助に次ぐ家老の奥野将監の墓が歴代社家墓地にある。

33 | ひよしじんじや
日吉神社



🏠 中区森本
378
■ 森本

創建沿革は不明だが、社殿の背後に巨岩があり、いわゆる磐座信仰をもとに建てられたものと推測される。寛永年間(1624~1644)の社殿が残され、現存する神社建築物としての歴史的価値も高い。とりわけ、正面にある三猿(見ザル・聞かザル・言わザル)の彫り物は一見に値する。祭神は大山咋神(おおよまくいのかみ)。

34 | いなりじんじや
稲荷神社



🏠 中区中安田
509-1
■ 32-1323
■ 中安田(中安田)

古くは西安田イヤが谷にあったとされ、14世紀には宮が谷に遷座する。現存する神像に暦応3年(1340)の銘が残っているのはこの時のものである。元和3年(1617)社殿が炎上し、これを機に現在地に社殿を再興、遷座して現在に至る。祭神は大國主命(おおくにぬしのみこと)、稲彥魂命(うかのみたまのみこと)、武甕槌命(たけみかづちのみこと)。中区3安田と西脇市羽安町にまたがる安田郷地域の住民を氏子としている。10月の秋祭りは、この地域には珍しく宵宮に太鼓が境内を練り歩き、賑わう。

35 | いちりつか
一里塚



🏠 中区岸上
■ 日赤東

一里塚が制度として確立したのは江戸時代初期で、36町(3,9273km)を一里とし、江戸を起点として主要道に一里ごとに5間四方の塚を築き、榎木や松の木を植えて全国に普及させた。岸上の「一里塚」は、姫路を起点とする「丹波街道」上にあり、「いちりやま」という小字が残っている。その伝承に基づいて、中町文化連盟が30周年を記念し、文化的遺産を後世につたえるため、平成6年3月に一里塚モニュメントを建立した。

36 | だんじょう
段の城



🏠 中区門前
■ 門前(門前)

段の城跡

段の城は、妙見山から南西に延びる尾根上に位置する山城で、標高484m付近に広がる上段曲輪群と、標高230m付近に広がる下段曲輪群から構成される。天正3年(1575)7月24日、別所重棟と森本城主藤本巻右衛門らによって攻められ落城し、城主有田源八郎朝勝一行は落人の道をたどり、加美区奥荒田まで落ち延び、自害して果てたと伝えられる。奥荒田の若宮神社には、朝勝が身につけていたとされる小刀などが祀られ、境内には多くの「五輪塔」が現存している。

37

かいのじょう
貝野城



貝野城跡からの眺め

- 🏠 中区東山
- 多可高校口 (那珂ふれあい館)
- 城跡まで徒歩約40分

戦国時代の山城で、北播磨地方に残っている城跡では、城郭の残りも良い山城跡と評価されている。この城は播磨の鉢山地帯にあり、但馬の国との関係も深く重要な一角をしめていた。1530年代後半には山名氏による改築も推定されており、幾つもの「畝状堅堀」が残っている。那珂ふれあい館から40分ほど登ると貝野城跡まで登ることができる。北はりま随一の展望を持ち、眼下には中区の町並みが広がる。

38

もりもとじょう
森本城



森本城跡

- 🏠 中区森本
- 森本

別名を「霞ヶ城」と呼び、平安末期に安田荘の地頭であった得平頼兼によって築かれ、天正年間(1573~1592)に、藤本巻右衛門秀清が城主になったと伝えられる。秀清は「阿良田合戦」に軍功をたてたとされているが、別所重棟に攻められて落城した。「しろやま」として地域の人々に親しまれている。北郭群の石積橋台から下方に百メートル以上に及ぶ「土壘付大堅堀(たてぼり)」がある。

41

しんぐうさんこふんぐん
新宮山古墳群



妙見山からの眺め(中央右が新宮山古墳群跡)

- 🏠 中区奥中
- 中央公民館前(奥中東)

古墳時代中期の古墳で、1号墳、2号墳、3号墳がある。1号墳は造り出しを有する古墳と推定され全長44mの、町内でも最大級の古墳と考えられる。中区の中心地の小高い山で、可視範囲も広く、未発掘だが甲冑・刀剣などが埋蔵していると伝えられている。

42

まこう ななふしぎ
間子の七不思議



しほやの足跡

- 🏠 中区間子
- 日赤東

県道東線西寄りの間子へ入る道路から、北向きに馬の蹄の型が点々と並ぶ小道が続き、右折して東へ数メートルの地点に「しほやの足跡」という石碑が建っている。往時はその近くの出水に滾々と名水が湧き出ていて、その中に「お姫さんと馬の足跡」と称する石があったのを掘り出したものである。石の子(子産み石)・八百八橋(隣へ行くの石の橋)・間子の夢(寒夢)(年中青々として枯れない)・出水(あちこちに湧水)・歩く雀(ピョンピョンと飛ばない)・五月のぼり(旗揚げと間違えて攻められるためのぼりを立てない)を加えて「間子の七不思議」と呼んでいる。

39

ひがしやまこふんぐん
東山古墳群



- 🏠 中区東山
- 多可高校口 (那珂ふれあい館)

妙見山麓一帯には200基を超える古墳が確認されており、その中でも特に規模の大きな集まりの一部を復元して、石室内等も見学できるようにしたものが「東山古墳群」である。これら12基の古墳群は6世紀末から7世紀にかけて築造されたものと考えられており、県指定文化財に指定されている。最大の1号墳は直径約30mの大きさで、横穴式石室の内部が見られる古墳としては県内でも最大規模を誇る。また、12号墳からは珍しい陶棺も見発見されている。

40

どうせいれんじょあとてんじかん
銅製錬所跡展示館



- 🏠 中区牧野 017-4(北播磨余暇村公園内)
- 30-0855(多可町役場建設課)
- 鍛冶屋(余暇村公園口)
- 要予約

多可町の秀峰妙見山麓に自然豊かな北播磨余暇村公園があり、その一隅に、全国でも数少ない銅製錬所跡がある。小規模ながら銅製錬の全工程を示す各種遺構がそろって発見され、国内では最初の発見であり、金属技術の研究上、また、生産遺跡の研究上特筆に値する遺跡である。焼釜や吹床など主な遺構が保存されており、収集されたカラミや土器など、貴重な資料も展示されている。銅の製錬遺構が国内ではじめて展示保存された場所である。

43

おくなか ながいし
奥中の長石



奥中の長石

- 🏠 中区奥中
- 中央公民館前(奥中東)

播磨国風土記に登場する大人から生まれたあまんじゃこ伝説の一つ。あまんじゃこは3里(12km)をひとまたぎする巨人。昔あまんじゃこが、中町中学校裏の丘山と茂利の太子山を取り除こうとして、石の天秤棒で担いだところ、二つに折れてしまった。その石の破片が奥中の新宮池東側国道427号沿いのミニパークに「奥中の長石」として設置されている。大きい石は510kg、小さい石は170kgもある。多可町内には他にも腰かけ石、塔の石、架け橋などの逸話が残る。

44

きん とりでんせつ
金の鶏伝説



崇福寺石塔跡

- 🏠 中区曾我井
- 曾我井

「金鶏伝説」とは、鶏が鳴く場所へ行き、掘ってみると金の鶏や財宝が埋まっているという話が伝わっているもので、多可町中区にも複数の伝説が伝わる。①法幢寺(中安田)の東南にある田の傍にある大石の下。②東安田の東部、石原坂の山中にある「長持ち石」の下。③糶屋の竹谷山の頂上に足で踏むとトントンとなるところ。④崇福寺(曾我井)の石塔の下に金の鶏が埋まっているという話の4つが知られている。崇福寺の石塔が現在地に移設される際には小さな石仏が掘りだされているので、そんな実在の話が転化したものかも知れない。

45 | やまだせいざぶろう
山田勢三郎



- 🏠 中区東安田
- 中安田(東安田公民館)

中区東安田のトンネル近くのサンクスパークに「山田翁」を讃える立派な石碑が建っている。天保14年(1843)に生まれた山田勢三郎翁は、かつて栽培されていた「安田米」の中からひょっこり顔を見せた一本の稲穂を改良し、酒造に好まれる酒米「山田穂」を誕生させた。「山田穂」を母、「短程渡船」を父として交配し、昭和11年(1936)に「山田錦」と命名された。現在毎年10月1日の「日本酒の日」に、歌手加藤登紀子さんを迎えて日本酒の日コンサートを催している。

46 | なか かん
那珂ふれあい館



- 🏠 中区
東山 539-3
32-0685
- 多可高校口(那珂ふれあい館)
- 休館日: 月・火(ただし第3週は日・月)と年末年始

那珂ふれあい館は、秀麗な姿をもつ妙見山の山麓にあり、隣接する東山古墳群をはじめ、町内から発掘された出土品の展示をはじめ、多可町の文化財についての調査、研究、啓発・活用を行っており、地域の歴史学習の拠点としての役割も担っている。また、体験学習室、陶芸・七宝室では、勾玉づくりや土器作りなど、歴史や伝統技術を学べる体験を行うことができ、研修室、談話室、ふれあい広場は、各種会議や憩いのスペースとして利用できる。

49 | かじやせんきねんかん
鍛冶屋線記念館



- 🏠 中区鍛冶屋
- 鍛冶屋(鍛冶屋)

西脇市駅から中区鍛冶屋駅を終点とする播州鉄道は大正12年(1923)に開通して、平成2年3月に廃線となった。一時は、播州三大祭と称した「金比羅祭り」に数万の参拝客を運んだ鍛冶屋線。「カナソハイノ国」を建国し、存続運動を続けた。旧鍛冶屋駅舎は記念館として資料や列車も展示され、今も住民の心に残っている。線路跡地は公園や歩道「歩っ歩(ぼっぽ)」になり、歩道には花樹が生い茂り散歩する人々の心を和ませてくれる。

50 | ばんしゅうかぶき
播州歌舞伎モニュメント



- 🏠 中区岸上
- 中央公園前(まちの駅たか)

国道427号中区岸上に「まちの駅たか」が平成24年にオープンした。その敷地の西側に播州歌舞伎モニュメントがある。播州歌舞伎発祥地は加西市の東高室で、往時は全国に名をとどろかせたと伝えられている。貴重な文化遺産として、嵐獅山・中村和歌若両氏によって多可町に受け継がれた。そして和歌若師匠の指導のもとに中町北小学校や公民館クラブ生が練習を重ね、随時公演につとめている。モニュメントには播州歌舞伎独特の所作やその歴史が刻まれている。

47 | みょうけんさん
妙見山



- 🏠 中区東山
- 多可高校口(那珂ふれあい館)
- 頂上まで徒歩約2時間

標高約693m、加美区千ヶ峰と八千代区の笠形山を併せて「多可の三秀峰」と呼ばれている。この山は登山道や案内板もよく整備されており、約2時間程度で登れるので、老幼問わずマイペースでの山登りが楽しめる。頂上からの眺めも壮大で、山桜や椿、クヌギやブナなどの灌木に加え鳥や昆虫たちも所々に出迎えてくれる。また大男のあまんじゃこ伝説が残っており、笠形山との間に橋を架けようとして、途中で中断したと言われる「あまんじゃこの忘れ石」や、頂上近くには、誰が積んだのかも分からない「あまんじゃこの石積み」がある。

48 | まきのおおいけ
牧野大池



- 🏠 中区牧野
- (牧野北)

秀峰妙見山の東山麓に位置し、水面はエメラルドグリーンで蕩々と波打ち、トンガリ山の逆さ影が美しく映える。大正2年(1913)、牧野地区の住民により、農業用水確保のために殆ど手作業によって築堤された。堤長は約200メートル余、堤高16メートル余の中心コア型アースダムが昭和8年(1933)に完成した。日やけ年に雨を降らせた龍神伝説も残る。地元中町中学校の生徒が打つ、「龍神太鼓」は、この地の龍神を想起させ、雄壮な音色が響きわたる。

51 | まつうち ばくぶつかん
松内ミネラルコレクション博物館



- 🏠 中区中村町
260
32-3626
- 多可町役場(多可町役場)
- 休館日: 日・祝・水
年末年始入館料無料

平成元年に益富壽之助博士の指導により、一人でも多くの人に、一つでも多くの石を紹介する目的で開設された。館には3万6000点の鉱物、3500点の岩石、880点の古生物化石、1500点の貝殻などを備えていて、民間個人の博物館としては、県内最大である。人々の暮らしに役立つ鉱物の色々な素顔を展示し、金属ごとにとどのよう暮らしに利用されたか、などなど石のふしぎ魅力がたっぷり! 標本を手にとってゆっくりと大地の恵みを観察してみたいかが?

52 | たけしまさん
武嶋山



- 🏠 中区東安田
- 中安田(東安田公民館)

魔崖仏

奇岩がそびえ立つ岩山で、中国の山水画を思わせる風景から、昭和26年に多可十景に選定された。清厳寺山上への参道には、八十八ヶ所霊場石仏が苔むして鎮座している。清厳寺から北方の谷向かいに、役の行者の魔崖仏が望める。あの難所の奇岩に痩せかけた役の行者像、何時、誰が、何のために刻んだのだろうか? なお、3月の第2日曜日には麓で厳かな護摩焚き供養が行われる。

お地藏さま

村境や道の辻、田の畦など、そこそこに佇む石のお地藏さまは、日本人にとって一番身近な仏さまといえるだろう。多可町の豊かな自然の中にもいろいろなお地藏さまたちが溶け込み、暮らしに密着した願いに耳を傾けている。

そんなお地藏さまにまつわる伝説のひとつが、中区天田の「あごなし地藏(柳地藏)」だ。立っているのは、岸上から鍛冶屋へ向かう道のかたわら。昔、年老いた百姓が、息子の病気を治してくれるよう、このお地藏さまに願掛けをした。高岸村の信心深い百姓で、医者にも見放された息子のために一心に祈った。49日の間祈り続け、満願の日を迎えたが、何の兆しもない。百姓は業を煮やして、お地藏さまをつかんで力任せに揺すぶったという。すると、「ううっ」とお地藏さまがうなったそうだ。そして、その日を境に、息子の病気は快方に向かったと伝えられている。なぜ「あごなし地藏」なのかははっきりしない。一般的には、顎がないのだから歯もない、だから歯も痛まないと歯痛の靈験を説くことが多い。八千代区坂本にも「おきの国のあごなし地藏」と呼ばれるお地藏さまが祀られているが、その由来も不明だ。こちらのお地藏さまは道標にもなっている。



あごなし地藏



六本地蔵

子授けの靈験で知られているのは、八千代区大屋の六本坂にある「六本地蔵」。自然石に刻まれた、小さなお地藏さまだ。お地藏さまではないが、八千代区・加美区にはイボが取れると信仰される「いぼ薬師」がある。古い石仏として知られるのは、八千代区下三原の地藏堂に祀られたお地藏さまだろう。刻まれた年紀は享保11年(1726)、衣が赤く彩色されているのがちょっと珍しい。同区赤坂のお地藏さまはその3年後に建立されており、今も8月24日に地藏盆が行われている。八千代区仕出原の薬師堂境内に祀られているお地藏さまは明治時代と新しいが、登校途中に強風のため野間川に落ちて亡くなった女の子の供養のために建立されたものだ。中区牧野で親しまれているお地藏さまは、享保3年(1718)にあった大飢饉がきっかけで建立されたと伝えられている。

中区のお地藏さまで紹介しておきたいのが、奥中の「桜木地藏」と同地区の観音寺に祀られている「日限地藏」。桜木地藏は、寛政7年(1795)に村が施主となって建立したものだ。観音寺の日限地藏は、夢の告げによって境内の楓の古木の下から掘り出されたといい、多くの信者を集めたそうだ。お地藏さまの穏やかな顔に慰められた、そんな経験をお持ちの方も少なくないだろう。多可町を巡り、いろいろなお地藏さまに出会っていただきたい。

播磨学研究所研究員 埴岡真弓

多可町加美区



杉原紙研究所で丁寧に手すきされている「杉原紙」

古き伝統と歴史を持つ日本一の手すき和紙 「杉原紙」発祥の地

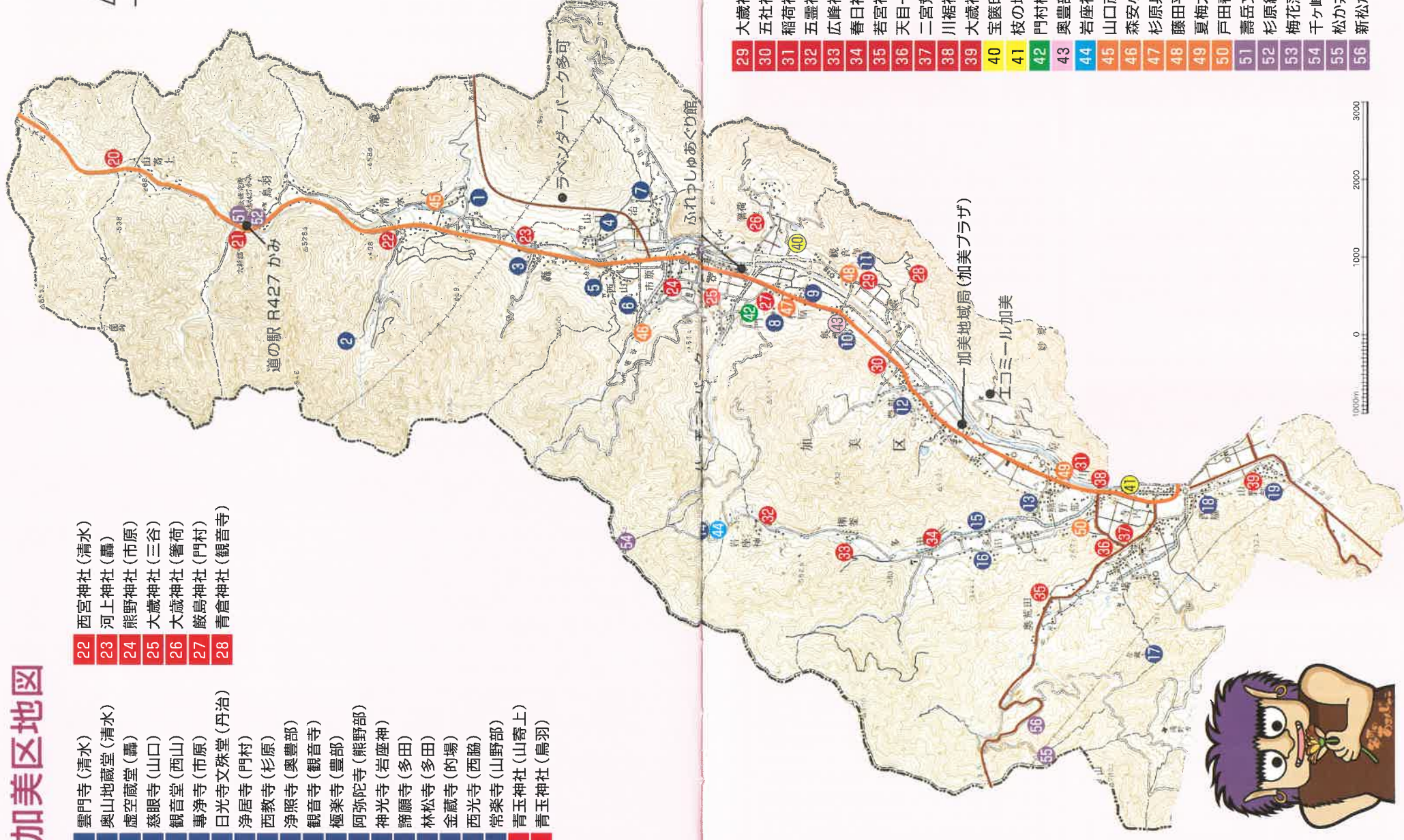
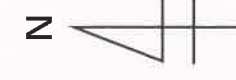
古来より日本一の名紙と謳われた手すき和紙「杉原紙」の歴史は古く、奈良時代後半に遡ると推定される。平安時代から室町時代には貴族、武士階級に最高級の献上品として広く用いられていた。その後の江戸時代には生産の最盛期を迎え、和紙を漉く家が300軒を超えたが、激増する需要に追いつけず、全国各地の製紙地で〇〇杉原などと地名を付した杉原紙が漉かれ始めたが、当地の紙はそれらの本家本元であり、品質も最上であったことから「播磨御上り杉原」として別格の扱いを受けた。その杉原紙も明治期に入ると西洋の製紙技術の流入により衰退の一途をたどり、大正末期には歴史の幕を一旦閉じた。

時を経て、この播磨の地で再び杉原紙を漉こうとの文化的な機運が高まり、昭和47年に全国でも珍しい「町営(旧加美町)杉原紙研究所」を設立し、杉原紙の生産を再開した。昭和58年に兵庫県重要無形文化財の認定を受け、平成5年には兵庫県伝統的工芸品にも指定された。

現在、加美区では杉原紙の原料である楮の木を町民の手で栽培・収穫する方を「1戸2株運動」(各戸の庭で2株の楮を育て提供する運動)として定着させるなど、町民自らの「心の誇り」として杉原紙の歴史と伝統を大切に守っている。

加美区地図

- 1 雲門寺 (清水)
- 2 奥山地蔵堂 (清水)
- 3 虚空蔵堂 (轟)
- 4 慈眼寺 (山口)
- 5 観音堂 (西山)
- 6 専浄寺 (市原)
- 7 日光寺文殊堂 (丹治)
- 8 浄居寺 (門村)
- 9 西教寺 (杉原)
- 10 浄照寺 (奥豊部)
- 11 観音寺 (観音寺)
- 12 極楽寺 (豊部)
- 13 阿彌陀寺 (熊野部)
- 14 神光寺 (岩座神)
- 15 譚願寺 (多田)
- 16 林松寺 (多田)
- 17 金蔵寺 (的場)
- 18 西光寺 (西脇)
- 19 常楽寺 (山野部)
- 20 青玉神社 (山寄上)
- 21 青玉神社 (鳥羽)
- 22 西宮神社 (清水)
- 23 河上神社 (轟)
- 24 熊野神社 (市原)
- 25 大歳神社 (三谷)
- 26 大歳神社 (箸荷)
- 27 巖島神社 (門村)
- 28 青倉神社 (観音寺)



- 29 大歳神社 (観音寺)
- 30 五社神社 (豊部)
- 31 稲荷神社 (熊野部)
- 32 五霊神社 (岩座神)
- 33 広峰神社 (棚釜)
- 34 春日神社 (多田)
- 35 若宮神社 (奥荒田)
- 36 天目一神社 (的場)
- 37 二宮荒田神社 (的場)
- 38 川裾神社 (寺内)
- 39 大歳神社 (山野部)
- 40 宝篋印塔 (箸荷)
- 41 枝の地藏 (寺内)
- 42 門村構居 (門村)
- 43 奥豊部古墳群 (奥豊部)
- 44 岩座神の七不思議 (岩座神)
- 45 山口茂吉 (清水)
- 46 森安小春 (市原)
- 47 杉原兵太夫安久 (杉原)
- 48 藤田平右衛門 (観音寺)
- 49 夏梅太郎右衛門 (熊野部)
- 50 戸田善次郎 (多田)
- 51 壽岳文庫 (鳥羽)
- 52 杉原紙研究所 (鳥羽)
- 53 梅花溪 (大袋)
- 54 千ヶ峰 (三谷)
- 55 松か井の水 (奥荒田)
- 56 新松か井の水 (奥荒田)

1

うんもんじ
雲門寺

加美区清水
213
36-0044
清水下

臨済宗妙心寺派
避船山雲門寺は応永8年(1401)、仏徳大通
禪師によって開かれた禅寺。当初は、清水奥
山地蔵付近にあったが、幾度かの移転の後、
現在の地に移ったと伝えられる。本尊は十一
面観世音菩薩。禅の道場として有名であり日
本建築の粋を集めた大伽藍と庭園は素晴らし
く、侘び寂びの極みを感じさせてくれる。
「鷹・猿猴捉月図(曾我直庵筆)」「出山釈迦図
(伝可翁筆)・寒山拾得図」など、町指定文化
財を含む多くの絵画資料を所蔵する。

2

おくやまじぞうどう
奥山地蔵堂

加美区清水
清水上

応永8年(1401)、仏徳大通禪師が祭祀された
と伝えられている。境内に薬師如来と地藏さん
がお祀りしてある2つの祠があり、薬師如来は
通称「いぼ薬師」として有名で、わらで作ったホ
ウキを持ち帰り、いぼの部分は何回もそのホウ
キで撫でると不思議にも治ると言われている。
最近、癩封じにもご利益があるとたくさんの方
々が願掛けに訪れ、病気が治ると新しいホウ
キが奉納される。

5

かんのんどう
観音堂

加美区西山
西山

西山には中世から近世において正蔵寺と荘蔵
寺の2つの寺院があったとされ、荘蔵寺は西
山墓地の南山麓に、正蔵寺はそこから北西約
400mのところ跡地がある。
正蔵寺は明治初期には、正蔵寺学校という寺子
屋があったとされる。現在は観音堂のみが現存
しており、両寺の位牌、仏像などが保管されて
いる。
また荘蔵寺跡には両寺の住職墓が統合して祀
られている。

6

せんじょうじ
専浄寺

加美区市原
437
36-0090
丹治

浄土宗西山禅林寺派
三百数十年前、発心上人(きゅうしんしょうに
ん)の開基と伝えられている。本尊は阿弥陀如
来坐像で、像高138cmの半丈六の割割造(わり
はぎづくり)。平安時代後期の作風をよく残して
おり、丹波市達身寺の阿弥陀如来坐像に作風が
酷似しており、注目される。
この阿弥陀如来坐像のほか、江戸時代初期の
絵画資料などが町指定文化財に指定されてい
る。

3

こくぞうどう
虚空蔵堂

加美区轟
轟

妙徳山明寿寺は現在廃寺となり、虚空蔵堂のみが
現存している。轟には当初、真言宗「日東山西光
寺」があり、その後、禅寺「妙徳山明寿寺」が建てら
れたと伝えられる。明寿寺は応永8年(1401)、雲
門寺開基の愚中大和尚が清水奥山地蔵付近に草庵
「雲門」を創建後、轟に守り寺「明寿庵」を建てた
のが始まりとされる。明治20年(1887)末寺廃止
令により雲門寺に統合された。虚空蔵堂は明和2年
(1765)に修復されたもので、当時の面影を残し
保存されており、毎年3月と8月に「数珠くり」の行
事が行われている。境内には、三界萬霊碑、三基の
地藏菩薩碑、大師堂、灯籠などが現存している。

4

じがんじ
慈眼寺

加美区山口
西山

福聚山慈眼寺と称し、雲門寺の末寺として天正
10年(1582)、天容元和尚の建立と伝えられ
る。この寺には位牌臺碑などが現存しているこ
とから、僧も住んでいたと推察できるが、たび
たび火災などにより焼失し再建されている。明
治20年(1887)、末寺廃止令により、雲門寺
に統合された。本堂は大正3年(1914)に移築
され最近まで公会堂として使用されていた。現
在はラベンダーパークに向かう道沿い左側に、
阿弥陀堂が現存している。境内からは山口・西
山・市原の集落とどっしりとした千ヶ峰の山容
を臨む風光明媚な景色が広がる。

7

にっこうじもんじゅうどう
日光寺文殊堂

加美区丹治
丹治

臨済宗妙心寺派
本尊の文殊菩薩は約1200年前「千日の行」に訪
れた法道仙人によって祀られたと伝えられている。
もともとは小屋場山にあったのを、いつの頃か、現
在の場所に移転され、その屋敷跡は「古文殊」と呼
ばれている。日光寺の開山年代は不詳であるが、延
宝検地帳に除地の記載があることから、少なくとも
四百年以上前の開基であろう。
知恵の文殊様として親しまれ1月には文殊祭りが行
われ受験生たちが大勢お参りしている。またこのお
寺の近くには、西国八十八ヶ所巡りの霊場、日切り
地藏、子安観音がある。

8

じょうごじ
浄居寺

加美区門村
48
36-0047
門村

臨済宗妙心寺派
本尊は観世音菩薩。寺名は、この地方の有力者
であった杉原兵太夫安久が、滅罪菩提所とし
て、構居の一角にとり込んだ観音堂を改め、天
文5年(1536)、浄居庵としたことに始まると
伝えられている。天正2年(1574)正月明けの
15日、別所氏により急襲を受け、兵太夫は戦
死、構居も寺も焼け落ちたといわれる。浄居寺
裏山には三重の大きな堀跡のみが今も残る。そ
の後寛永5年(1628)、雲門寺の中興・空山和
尚の弟子である達外玄賀和尚が師の命により
再興され現在に至っている。

9

さいぎょうじ
西教寺

加美区
杉原 60
36-0176
杉原

浄土真宗本願寺派

開基は慶長7年(1602)で、数度火災に遭い、現在の堂宇は戦後に再建されたものである。本尊は文化6年(1809)4月20日に西本願寺より下賜された阿弥陀如来立像で、安阿弥様の様式を伝える。安永2年(1773)の銘のあった喚鐘(かんしょう)は戦時中に供出され、惜しくも今は残っていない。境内には銀杏の木(乳の木)があり秋には見事に色づく。

10

じょうしょうじ
浄照寺

加美区
奥豊部 33
奥豊部

浄土真宗本願寺派

もとは、境内に祠を祀り、真宗の総道場として栄えていたが、寛政8年(1796年)、本尊の阿弥陀如来が西本願寺より下賜され、開基したものとされている。

13

あみだじ
阿弥陀寺

加美区
熊野部 452
35-0469
熊野部

高野山真言宗宝城院末

本尊は阿弥陀如来。度重なる火災で記録はないが天文年間(1532~1555)の開創で、元は氏神である稲荷神社の宮寺であったと伝えられている。寺には古い「鯛口」が保管されており、銘によると当時熊野部には長満寺という寺があり、室町時代の応永11年(1404)11月20日に信正と言う人が願主となり、大工の曾地円秀が造ったと記されている。しかし長満寺がどこにあったのかは不明で、この鯛口が長満寺の存在を物語る唯一の物で、平成11年、多可町指定文化財に指定されている。

14

じんこうじ
神光寺

加美区
岩座神 237
(岩座神)

真言宗御室派

白雉年間(650~655)法道仙人による開基を伝える。本尊は十一面観音立像。中世期の播磨の地誌「峰相記」には、堂塔も百あまりを備える大寺院で、隆盛を極めていたが、天正の兵乱で廃退したと記されている。宝暦年間(1751~1764)、明道上人が往時の末光院を復興して本堂とした。現在の本堂の背後にそびえる千ヶ峰山中には、中世期にさかのぼると考えられる寺院跡の遺構がみられ、石垣や堂塔の敷地跡、池跡などが残る。現在、棚田の中に建つ山門には威厳のある鎌倉時代の金剛力士像(町指定文化財)が安置され、往時の面影を偲ぼせる。

11

かんのんじ
観音寺

加美区
観音寺 104
奥豊部

建立は天平宝字年間(757~765)、法道仙人の開基を伝える。本尊は十一面観音、脇侍には不動明王と毘沙門天が配置されている。天正時代(1573~1592)に焼失し、現在の字山田の地に再建された。元禄年間(1688~1704)に大破したが、享保2年(1717)に再々建された。観音寺の盛衰は樺坂鉦山の歴史と密接に関わる。享保年間(1716~1736)、樺坂鉦山が隆盛を極め、鉦夫の多くが檀徒で、2000人近くあったとされる。その後無住になっていたが、大正12年兼務住職極楽寺森本証教師の尽力により復興し、敷地義導師を朝鮮より招き、現在に至っている。

12

ごくらくじ
極楽寺

加美区
豊部 760-2
35-0049
豊部

高野山真言宗

本尊は大日如来。白雉年間(650~655)法道仙人の開祖にかり、堂宇もきわめて多くあったと伝えられている。当初は西側の森内山の山中にあったと伝えられ、山中には阿弥陀屋敷などの通称地が残る、近世末の寺跡も遺存している。度重なる移転や、火災により焼失し現在の堂宇は大正末期に再建された。

15

たいがんじ
諦願寺

加美区
多田 207
35-0262
加美町農協前(多田)

浄土宗西山禅林寺派

本尊は阿弥陀如来。大永3年(1523)、遣空上人、観沢大和尚の開創にかり、後、鉦山の盛んであった頃、七世常山和尚が浄土宗に改宗し銅山寺として栄えたと伝える。周辺には、久留寿鉦山跡、宮前鉦山跡、勝浦鉦山跡などの鉦山跡が残る。この寺に安置されている二十五菩薩来迎像は、それぞれの背面に施主銘が記されており、当時の地域の信仰のあり方を示す貴重な資料として、町指定文化財に指定されている。

16

りんしょうじ
林松寺

加美区
多田 1073
加美町農協前(多田)

浄土宗西山禅林寺派

天文8年(1539)に開基、薬師如来護持のため建立されたといわれる。薬師如来は、多可郡三薬師(金蔵寺・円満寺・林松寺)の一つとして信仰されてきたが、無檀寺であり、諦願寺檀家が維持してきた。文政5年(1822)に諦願寺本堂が焼失したので、詳細な記録は残っていない。現在は薬師堂のみが残っており、町文化財指定の薬師如来坐像(鎌倉時代)が安置されている。毎月8日が縁日で、午前10時ごろ、近くの信者がお参りしている。

夏の行事 - 水と火の祭り -

多可町の夏は、水と火の祭りが交錯する季節だ。まず、水の祭りから見ていきたい。加美区轟では、7月に「川裾(川下)祭り」を行う。播磨北部から丹波・但馬にかけて多く分布していた水神を祀る行事だが、今は見ることが少なくなった初夏の風物詩だ。氏神の河上神社の南、杉原川と轟谷川の合流地点に祭壇が設けられ、「川裾大明神」のご神体を入れた祠が運ばれてくる。巨大な岩がせり出し、その下に祠跡らしい気配が残る場所があり、昔はそこに川裾大明神が祀られていたともいう。神事を執り行うのは、川裾祭りの「お禰人さん」たちだ。今は、子供会が主宰する灯籠流しが夜に行われている。川音が響く中、灯籠の火が流れていく光景には、何とも言えぬ風情がある。灯籠流しに興じる子どもたちも、ふっと水神様の存在を身近に感じる瞬間があるかもしれない。中区間子など、多可町では今もいくつかの川下祭りが伝えられている。いずれも規模は小さいが、その小さな祭りを受け継いでいこうとする営みの中に水神への畏怖の念を感じずにはいられない。



菅荷の火祭り

水の祭りの次は、火の祭りを紹介しよう。加美区菅荷には、山の中腹にある新しい墓地の上に地藏堂が祀られている。その地藏堂からさらに200mほど登った杉林の中に鎮座しているのが、火伏せの神、愛宕神社だ。8月24日に近い日曜日、「本当」「愛宕当」と呼ばれるお当人たちが中心になって行う行事で、オトウ渡しも行われる。火祭りの開始を告げるのは、先達さんの叩く鉦の音だ。先達さんの後にお当人さんが続き、地藏堂を出発して愛宕神社へ。神社に到着すると、神前のロウソクの火をご神灯に

移し、拝礼の後、般若心経を誦読。先達を先頭に地藏堂へ戻ると、愛宕神社でいただいた火を祭壇のご神灯に移し、用意した松明に火を付ける。そして、祭壇前で拝礼し、再び般若心経を唱えて無病息災などを祈願する。神と仏の混在する行事だ。この火祭り終了後に、愛宕当のオトウ渡しが始まる。

また、八千代区柳山寺には、「ぼっぼこねんじゃ」と呼ばれる火祭りがある。主役は子どもたちで、夕方氏神の大歳神社に集合、松明を持って愛宕山へ登り、山頂にある愛宕神社で火をもらい、松明を掲げて山を下る。大声で「ぼっぼこねんじゃ、ほうねんじゃ」と唱え、村の中の神社へ向かう行列を、ロウソクを持った人々が待ち受ける。その火をもらおうと家内安全、無病息災と信じられているからだ。

かつて人々が大きな畏れを持って接していた水と火、その祭りの伝統が今も多可町の夏を美しく彩っている。



ぼっぼこねんじゃ

17

こんざうじ
金蔵寺



加美区
的場 853

35-1247

加美町農協前
(的場)

高野山真言宗
海拔400mの山中に建ち、通称「かなくらさん」と親しまれている寺院。その昔、笠形山に湧出した6cmほどの黄金仏薬師如来が、熊野権現と共に当山に移られ大木の上に止まっておられたのを、役行者が感得し、開山された。また、行基菩薩が天平2年(730)に登山され自ら等身大の仏像を刻んでこの黄金仏を胸に安置して本尊とし、仏殿を建立、以来、金蔵山金蔵寺と称するようになり、その後、慈覚大師が来山されたと伝えられ、奥の院には役行者・行基菩薩・慈覚大師が祀られてい

る。現在の本尊は室町時代に造られた薬師如来で日光菩薩と月光菩薩を協侍とし薬師三尊となり、眷属として護法神の十二神将を従えている。また、阿弥陀如来坐像は頭部が奈良時代の乾漆仏、体部は江戸時代の木造である。建造物としては、本堂(安政2年建立)、庫裡、鐘楼堂、籠もり堂、井天堂、権現堂、奥の院、八角堂などがある。境内には、この他、樹齢千年杉、修験行場、かなくら四国八十八ヶ所霊場などがあり、春秋の彼岸会には、近郷先達衆の助法を得て柴燈大護摩供を厳修する。

18

さいこうじ
西光寺



加美区
西脇 437

35-0208

月ヶ花
(西脇南)

高野山真言宗
石土山西光寺と称し、本尊は十一面観世音菩薩。
約500年ほど前の開基と伝えられる。最も栄えた頃には五院十二坊があったと言われ、今も当寺の裏山にはその堂宇跡が残っている。「みるくさん」と呼ばれる行事が毎年1月に行われる。安置されている弥勒菩薩の首から上の穴のあいたところ(目、耳、鼻、口)の願いが叶えられると言われている。

19

じょうらくじ
常楽寺



加美区
山野部 653

35-0504

月ヶ花
(山野部)

開基は不明。本尊は室町時代作の薬師如来。天明～文政(1781～1830)頃の住職であった慶祐上人は、大飢饉に苦しむ農民の救済を願い、「入滅後は首から上の病はかならず治す」と遺言して入定されたという伝承を残す。この慶祐上人の墓は、山野部地区の墓地の近くにあり、「慶祐さん」として、今も地域の人々によって大切に祀られている。

21

あおたまじんじゃ
青玉神社

夫婦杉

加美区
鳥羽 735

杉原紙の里

天戸間見命(あまのとまのみこと)と大歳御祖命(おおとしみおやのみこと)をお祀りしている。創建年月は不詳。当初は三国岳の頂上に鎮座し、後に現在の地に遷座されたと伝えられている。天戸間見命は別名、天目一箇命(あめのまひとつのみこと)と言う。鍛冶の神様で片目を失明され青くなったことから、青玉神社と呼ばれるようになったと伝えられているが、諸説ある。毎年7月の15日に近い日曜日に湯立て祭りが行われ参拝客で賑わっている。この祭りは神事に続き、巫女が釜のお湯を笹の葉で振

りまく行事で、このお湯をかぶると病気になるという言い伝えがある。また境内には杉の大木が林立し、中でも拝殿を囲むように立つ7本の杉は樹齢600年から1000年という巨木で、昭和43年、県指定文化財に指定された。またそのうち最も巨大な杉は地上8mの幹の途中から2つに分かれて天に伸びており、「夫婦杉」と呼ばれ、夫婦円満と縁結びのご利益が信じられている。何度か倒木の危機にあったが、地元への寄付など多くの住民の力によって救われて保存修理され、現在も青々とした葉を茂らせている。

20

あおたまじんじゃ
青玉神社

加美区
山寄上 183

山寄上

創建年代は不明であるが、当初は、三国岳の山頂に位置していたものが、三国岳を臨む現在の地に分祀されたと伝えられる。祭神は鍛冶の神様とされる天目一箇命(あめのまひとつのみこと)で、袖の木のトゲで目を突き、片方の目が青色になったため青玉神社と呼ばれるようになったと伝えられている。毎年秋には、五穀豊穡の祈願、感謝の意で「曳山まつり」が行われる。男子(跡継ぎ)が生まれるように、青玉神社に曳山をつくり献上したと言われている。

22

にしのみやじんじゃ
西宮神社

加美区
清水 655

清水上

祭神は積羽八重詞代主命(つみはねやえことしろぬしのみこと)。創建年月は不詳。応永17年(1410)12月に本殿を再建した棟札が残されており、青玉大歳大明神と称し、同じ集落の山城にある天神を東宮と呼んでいることから、方位的にも西にある当社を西宮と称するようになったと伝えられている。現本殿は安政5年(1858)に再建されたもので本殿は流造で、切妻造の幣殿と流造の拝殿を併せ持つ。毎年1月の第2日曜日(成人の日)に商売繁盛を祈る戎祭りが行われており、地元では「えべっさん」と呼ばれ親しまれている。

23

かわかみじんじゃ
河上神社

加美区轟
797

轟

祭神は弥都波能売命(みつはめのみこと)、一杵島毘売命(いちきしまひめのみこと)、萱田別命(ほんだわけのみこと)。創建年月日は不詳。柿葺流造の本殿と切妻造の幣殿、入母屋造の拝殿を有している。毎年7月に、御神体を移し盛大に河裾祭りが行われている。轟・山口・西山の3集落共有の神社で、秋祭りには華麗な御輿があり、各地区から当番の担ぎ手が白装束で3集落を巡回して練り歩く。

24

くまのじんじゃ
熊野神社

加美区市原
671

丹治

祭神は、伊弉諾尊(いざなぎのみこと)、伊弉冉尊(いざなみのみこと)、大年神(おおとしのみこと)。流造の第一、第三本殿と、入母屋造の拝殿があり、創建は不詳だが、古検地以降に創建されたものとみられる。また、毎年10月には、この神社の宵宮祭りを盛り上げるため、隣保対抗の村芝居行事が行われる。

25

おおとしじんじゃ
大歳神社

加美区三谷
620

門村

祭神は大歳神、創建年月日は不詳。周囲が竹林だったので、竹の宮とも言われ、明治7年(1874)2月に「村社」の社格となった。明治41年(1908)に宇迦能靈命(うかのみたまのみこと)萱田別命(ほんだわけのみこと)を合祀。終戦後、社格が廃止され、宗教法人「大年神社」として護持されている。かつては大袋村を含めた郷社的な神社であり、大袋大歳神社には三谷大歳神社の遷拝所が存在している。流造の本殿と、入母屋造の幣殿、入母屋造の拝殿がある。

26

おおとしじんじゃ
大歳神社

加美区善荷
43

門村

祭神は大歳神、創建年月日は不詳だが、元禄13年(1700)に本殿を再建している。流造の本殿、入母屋造の拝殿を有している。毎年2月11日の建国記念日に、その年の五穀豊穡や諸行繁栄を願う百々手(ももて)祭りが行われている。神事が終わると宮司やトウ人など12人が手製の弓と矢で約15m離れた的を射る。的の真ん中には鬼と書かれ、その上を墨で塗りつぶし、四方の悪魔を弓矢で追い払う。矢を家に飾っておけば福が授かると言われている。

27

いつくしまじんじや
巖島神社

加美区門村
74
■ 門村

一杵島比売命(いちきしまひめのみこと)と誉田別命(ほんだわけのみこと)を祀っている。創建年月日は不詳であるが、同じ集落にある浄居寺の鎮守として創建されたと伝えられている。戦国時代、この地に城を構えたといわれる杉原兵太夫安久氏が崇敬されていたが、天正2年(1574)、杉原兵太夫安久氏が討ち滅ぼされて荒廃したと伝えられている。貞享3年(1686)、社殿を改築し再興された。宮造物としては、春日造の本殿と、切妻造りの祝詞殿、瓦葺入母屋造の拝殿がある。

28

あおくらじんじや
青倉神社

加美区観音寺
■ 奥豊部

観音寺の桜並木道を登っていくと山の中腹に、大きな岩板の上でひっそりとたたずむ祠があり、目の病気に大変ご利益があると言われる。チョロチョロと流れでる岩清水で目を洗うと病気が治ると言い伝えられており、現在でもお参りする人が絶えない。青倉神社周辺はその首樺坂鉱山として栄えた。鉱山跡は、現在はうっそうとした山林になっているが、石垣などが残され、往時を偲ばせる。

31

いなりじんじや
稻荷神社

加美区熊野部 768
■ 熊野部

創建は天文2年(1533)と伝えられ、数度の改修を重ねて今日に至る。祭神は宇賀能靈神、大歳神、若歳神。いつごろから始まったのかは不明であるが、この神社では集落特有の「すべ切り餅」をお供えする。「すべ切り餅」とは、わらすべ(わるしべ)でも切れるくらいに柔らかく搗いた餅の事で、お供えする鏡餅は男性が口に神の葉をくわえ、無言で搗く。その他の餅は唄いながら搗く珍しい行事である。

32

ごれいじんじや
五霊神社

加美区岩座神 51
■ (岩座神)

創建は文化6年(1809)9月。祭神は高皇産靈神(たかむすびのかみ)、神皇産靈神(かみむすびのかみ)、火産靈神(ほむすびのかみ)、稚産靈神(わかむすびのかみ)、津速産靈神(つはやむすびのかみ)の5神を祀る。この、五霊神社境内には「ホンソバタブ」が自生。クスノキ科の常緑高木で通常大きいもので胸高幹回りが2,2mになるが、五霊神社のホンソバタブは大きいものから順に4,8m、3,84m、3,38m(平成3年当時)。一番大きい木は県内最大の巨木であると同時に、この3本は平成3年12月24日に郷土記念物に指定された。

29

おおとしじんじや
大歳神社

加美区観音寺 389
■ 奥豊部

大歳神社は樺坂鉱山を経営していた生野の住人らが鉱山の鎮護として字舟舟に勧請したと伝えられている。この大歳神社は「神主」と「青年宿」という二人のオトウ人によって管理されており、オトウ渡しの際には新旧四人のオトウ人が「ずいきの酢味噌和え」を食べるというめずらしい風習が残っている。かつて観音寺は豊部五社神社の氏子で、豊部から神楽も伝わった。その後、神楽は若者の減少により平成3~7年まで休止していたが、平成8年神楽講(神楽保存会)として復活し、毎年秋祭りには本殿と豊部の五社神社に向けて奉納されている。

30

ごしゃじんじや
五社神社

加美区豊部 1413
■ 豊部北口

祭神は素戔嗚尊(すさのおのみこと)と誉田別命(ほんだわけのみこと)、神皇産靈神(かみむすびのかみ)、大山祇命(おおやまつのみこと)。創建年月日は不詳。谷桐基国が柏谷の四町四面を見立てて笛草城を築き、同地所在の土饅頭七つのうち五つを持ってきて、神霊がおわずとして五社と称して当社を創建したと伝えられている。造営物は、流造の本殿と、切妻造の幣殿、入母屋造の拝殿がある。秋の大祭では屋台も繰り出し、この地域の青年たちによる荒神祓い(こうじんばらい)の舞も披露される。

33

ひろみねじんじや
広峰神社

加美区棚釜
■ (棚釜)

棚釜には氏神である多田の春日神社、村の大歳神社と広峰神社の三つのオトウがある。西の山に鎮座する広峰神社は、本殿、幣殿、拝殿を持ち、隣にはこもり堂があり、植林される前は村が一望の下に見渡していたようである。祭神は牛頭天王で、かつてはオトウ渡しの前に姫路の広峰神社に参拝していた。拝殿には明治16年(1883)に奉納された絵馬「四季耕作図」が掲げられている。この絵馬は広峰神社を中心に棚釜の農耕の様子を描いたもので、農具や服装など、当時の様子がよくわかる資料としても貴重である。

34

かすがじんじや
春日神社

加美区多田 212-1
■ 加美町農協前(多田)

創建年月日不明、祭神は天児屋根命(あめのこやねのみこと)と巖島姫命(いつくしまひめのみこと)。大正14年(1925)に社殿が再建されている。本殿は入母屋造。切妻造の幣殿と入母屋造りの拝殿も有している。多田と棚釜の氏神である春日神社のオトウは、棚釜のオトウ一人を含む六人で構成されている。オトウ人の代表である神主宅に、「カミサン」と呼ばれるオトウ状箱を祀り、神主だけが本殿内に入れる。オトウ渡しは10月の秋祭りに行われている。

35

わかみやじんじゃ
若宮神社

加美区
奥荒田

■ (奥荒田)

建立は江戸期以前と推定される。天正3年(1575)7月24日明け方、中区門前の「段の城」が三木城主別所重宗等の奇襲攻撃を受け落城しており、城主であった有田源八朗朝勝が従者と共にこの地まで落ち延び自刃したとされ、その主従をお祀りしているという伝承が伝えられる。現在でも地元の人に、手厚くお祀りされている。

36

あめのまひとつじんじゃ
天目一神社

加美区的場

■ 松井庄診療所前(約場)

二宮荒田神社の北側の小高い丘の上に小さな祠があり天目一神社(あめのまひとつじんじゃ)と言う。祭神は天目一箇命。往古は二宮荒田神社の辰巳北方に勅使塚があり、その傍りに鎮座していたが、水害により荒廃零落したので、「御田上」と呼ばれる当地に遷座されたと伝えられる。霊亀元年(715)に完成した「播磨風土記」によれば、道主日女命と天目一箇命は夫婦神と記されている。

38

かわすそじんじゃ
川裾神社

加美区寺内

■ 加美町農協前

杉原川と多田川が合流したところ、松井庄大橋のすぐそばの、小さな神社である。この川裾神社は地元では「かわっさはん」と呼ばれ親しまれている。昔、どこからかこの神様が流れてきて、ここで水害が止まったという伝説があり、小さな祠を立てて、祀られるようになったと言われている。夏に行われる川裾祭りにお参りすると、夏負けせず、また水害などを防いでくれるとされ、多くの方がお参りされる。

39

おおとしじんじゃ
大歳神社

加美区
山野部 503

■ 月ヶ花(山野部)

創立年月日不詳、祭神は大歳神(おおとしのかみ)、天御中主神(あめのみなかぬしのみこと)。天保年間(1830~1844)、火災のため社宝および重用書類等は焼失したと伝えられている。延宝検地(1677)には、古検以来広域な社域の除地があるとする記述がある。また神社前には、溢禦塚(いつぎょづか)がある。徳川中期、杉原川の氾濫を留めるため、安楽田村清水権兵衛が西脇集落と協議し、西脇地区を通る現在の水路を完成させた。清水権兵衛の恩義に感謝するために建立された。

37

にのみやあらたじんじゃ
二宮荒田神社

加美区
的場 145

■ 松井庄診療所前(松井庄診療所)

祭神は少彦名命(すくなひこなのみこと)、木花開耶姫命(このはなさくやひめのみこと)、素戔嗚尊(すさのおのみこと)の3神、社伝によると、天平勝宝元年(749)5月7日少彦名命が村内の福原宇神立に天からお降りになった。その夜大雨が降り、村人達が雨の上がるのを祈ったところ、願いが叶ったためこれに感謝して村内宇野尻に小社を建てて、荒田神社としたと伝えられている。平安時代には坂上田村麻呂の崇敬を受けたという伝承をはじめ、播磨国二宮として多くの崇敬を集め

てきた。建物は流造の本殿と切妻造幣殿、入母屋造の拝殿がある。秋の大祭には昔からいろいろな行事があり、代表的なものとしては昭和初期まで「馬かけ」があったが、馬が軍に取られ、行われなくなった。今も続く行事としては「お旅」がある。この行事は、坂上田村麻呂の一行を迎える神事として実施されている。

40

ほうきょういんとう
宝篋印塔

加美区善荷

■ 門村

塔の正面に「右□中 為一結念仏衆□ 文和三甲午十月敬白」と刻銘がみられ、文和3年(1354)に建てられたことがわかる。昭和52年の圃場整備に伴い、現在の地に移設された。移設の際、華厳経が墨書された一字一石経が多量に出土している。この塔は、板場家によって祀られており、火あぶりの刑によって亡くなった人を供養する石塔であるため、水で練っただけの団子をお供えすることが代々伝えられている。

41

えだ じぞう
枝の地蔵

加美区寺内

■ 加美町農協前

享保9年(1724)、寂室玄光の母寂室恵心が発願し、幼くして他界した霊の供養にと、地藏尊の片手に「おむすび」を託し、人々の守り佛として建立したのが始まりとされる。以後、寺内集落をはじめ周辺の人々の安産や健康を守って下さる地蔵尊として祀り続けられた。現在交通の激しい国道沿いに鎮座され、今なお子どもたちや諸人の交通安全・家内安全の守護尊であり、願いをかなえて下さる枝のお地藏さんとして厚く祀られている。

42

かどむらこうきょ
門村構居

加美区門村
門村



門村構居跡と浄居寺

門村字「カマヘ坪」付近にあった中世の城館で、天正2年(1574)、三木別所氏の攻撃を受けて敗れた杉原兵太夫安久の居城であったと伝えられている。カマヘ坪西側山麓には、今も全長300mに及ぶ三重の土塁と壕などが残されており、かつてはカマヘ坪全体を囲んでいたものと考えられる。この土塁の内側には、武士団の守護神である八幡大菩薩を祀ったという八幡屋敷と呼ばれる平地がある。一方この門村構居の南に接して、城主の菩提寺であった浄居寺があり、西側の山頂には詰め城としての門村山城の遺跡があって、中世城館跡の名残をとどめている。

43

おくとよべこぶんぐん
奥豊部古墳群

加美区奥豊部
奥豊部



奥豊部一号墳出土土器

6世紀から7世紀頃の古墳群。東向きの山麓部に14基~15基の横穴式石室墳が確認されている。平成9年に1号墳の発掘調査が行われ、全長12.4m×10.4mの円墳をとりまく石列や、全長9.4mの長大な横穴式石室が検出されたほか、石室内からは、比較的良好な状態の土器や金属器が大量に出土した。現在古墳の形としては残っていないが、出土物などは那珂珂あい館で保管・展示されている。

44

いさりがみ ななふしぎ
岩座神の七不思議

加美区岩座神
(岩座神)



仁王門とシキミ



千本杉



唐滝

- ・血石：岩座神の入口、道の西側に、巨石があり、上が平らで赤みを帯びていることから血石と呼ばれている。その昔、直ぐ近くにある神光寺に遺体を運び葬った際、死者を一度この石の上に置いたので、血石と名付けられたと言われている。
- ・仁王門のシキミ(しおれシキミ)：神光寺仁王門前にあるシキミは、午前中は枝葉に勢いがあって光っているが、午後になると急に勢いがなくなり光沢もあせてしまうとされている。
- ・唐滝(からだき)：干ばつの際、この滝でウナギを獲ると、必ず雨が降ると伝えられている。また、この滝には大蛇が棲み、1人で足を踏み入れた者は誰1人として無事に帰れないと言われている。
- ・千本杉：神光寺上の山中にある杉で、木の中ほどから、無数に枝が分

- し、不思議な木を形作っている。昭和8年天然記念物に指定、昭和47年3月24日に兵庫県指定文化財に指定されている。
- ・塔の石：高さ10mあまりの巨岩で、塔のようにそそり立っており、「岩座神」という集落の名前もこの岩に由来すると言われている。また昔、あまんじゃこが夜中に天まで五つの岩を積み重ねて四つまで積んだとき夜が明けたので、一つをここに残したのだという説も伝えられている。
- ・雨乞岩：千ヶ峰の稜線にあり、ここで、雨乞踊りをすれば、必ず雨が降ると伝えられている大岩。
- ・三本竹：常に三本の竹が群がり、たとえその中の1本が枯死しても、また新しく1本生えて、いつもその数に増減がないと言われていたが、現存していない。

45

やまぐちもきち
山口茂吉

加美区清水
清水下



アララギ派の歌人、山口茂吉は明治35年(1902)4月11日この地に生まれ、苦学しながら中央大学を卒業し斎藤茂吉に師事した。長い間病氣と闘いながら、自身の歌集「赤土」「杉原」「海日」「高清水」の出版、「斎藤茂吉全集」の編纂に力をそそぎ、故郷を思う歌をたくさん残したが、56歳でこの世を去った。杉原川沿い北部体育館のそばに歌碑がある。「春の雪 峰ぶりしつづ寒からむ わがふるさとの村を思へば」という望郷の念を歌った有名な歌である。

46

もりやすこはる
森安小春

加美区市原
丹治



現丹波市山南町上新庄区の堂本家に生誕。明治33年(1900)、4歳の時に森安家の養女になり、献身的に家の仕事を手伝い、養母や養父を助けた。そのことが広く世間に知られたり、大正4年(1915)、婦人世界社が全国3孝女の内の1人に選定し、県知事からも表彰される。市原の集落はすれの実家近くに「こはる公園」がある。ここは集落の人々が彼女に贈った畑の跡地で「孝行畠」と呼ばれ、孝養の徳を広く世に伝え、世人の鏡となるよう記念して、大正5年(1916)、杉原谷尋常小学校長の竹内治郎氏により石碑が建てられた。現在、市原集落では孝行のメッセージ集作成や孝行ロード整備が行われている。

47

すぎはらひょうたゆうやすひさ
杉原兵太夫安久

加美区杉原
杉原



天文・永禄年間(1532~1570)近在10余カ村の首長であった杉原兵太夫安久は門村に構居や、裏山の山頂に詰め城「笛草城」を築いたと伝えられている。しかしながら天正2年(1574)1月15日大見坂(近江坂)から攻めてきた織田信長方の武将・別所孫右衛門重宗等の攻撃を受けて落城、従士17名と共に、村はずれで自刃して果てたと伝えられている。国道427号沿いの浄居寺を望める場所に杉原兵太夫安久供養塔が残っている。

48

ふじたへいえもん
藤田平右衛門

加美区観音寺
奥豊部



藤田平右衛門は、加美区観音寺出身で、郷里の産業振興に力をいれた3代目杉原谷村村長であった。特に、凍コンニャク製造の功績が称えられ、大正8年(1919)7月兵庫県凍コンニャク同業組合が顕彰碑を建立した。顕彰碑は門村の島田橋から観音寺地内に移され、郷土の特産品の歴史を物語る由緒ある石碑として大切にされている。農閑期の副業として厳冬期の自然を利用し多くの農家が製造していたが、現在では全国で唯一加美区丹治集落にある一社のみとなっている。

49 | なつうめたろうえもん
夏梅太郎右衛門



加美区
熊野部
熊野部

徳川幕府も後半になると乱れはじめ、悪い役人が横行し、民に過酷な税を課し私腹を肥やすものが増えてきた。当時、熊野部は生野代官所に属しており、当地も例外ではなかった。この窮状を救うため、時の庄屋、夏梅太郎右衛門はご法度の直訴を行い、「庄屋の命と引き換えなら…」と言う代官の命により、明和元年(1764)6月25日、村内にて火あぶりの刑に処せられた。その後は悪政も止み、平穏に暮らせたと伝えられている。この遺徳を後世に語り継ぐべく明治44年(1911)7月村の有志により顕彰碑が建立された。現在の顕彰碑は平成15年に再建されたものである。

50 | どだはるじろう
戸田春次郎



加美区多田
加美町農協前(松井小学校)

多可町立松井小学校の西側、県道を隔てた高い所にあるこの追慕碑は、明治時代に松井小学校に勤務されていた戸田春次郎先生を偲んで建てられた碑である。戸田先生は明治13年(1880)から26年間勤務され、児童はもとより地域住民から尊崇と敬愛を集められていた。教育一途に精魂を傾けられていたが、42歳の若さで急逝。当時、村議会からも先生の葬儀費用として金20円の出出があったことから、その人格を知ることが出来る。門下生17名が先生を慕い建立した。

53 | ばいかも
梅花藻



加美区大袋
大袋

キンポウゲ科の多年草で、水温が17℃以下の清流にしか育たないため水質環境の指標とされている植物である。加美区大袋集落一帯の水路では、梅のような白くかわいい花が初夏から初秋にかけて咲き乱れる。集落でつづくりの一環として、梅花藻の保全に取り組んでいる。千ヶ峰から流れ出る清流と、この地域にすむ人々の「きれいな水を下流に流そう」という住民運動が実を結んで、梅花藻の生息域が徐々に広がりがつある。

54 | せんがみね
千ヶ峰



加美区三谷(市原・岩座神)
市原コース：丹治三谷コース：門村岩座神コース：(岩座神)
頂上まで
徒歩2時間

千ヶ峰山頂から笠形山方面

千ヶ峰は標高1005.2m、東播磨最高峰の山で、兵庫50山の一つに選定されており、笠形山と共に、笠形山千ヶ峰山立自然公園の重要な一角を為している。登山口は三谷コース、市原コース、岩座神コースの3つがあり、頂上は360度視界が広がって晴れた日は明石海峡大橋まで見渡せ、多くの登山者が訪れる。毎年10月に行われる「多可町仙人ハイク」は千ヶ峰と笠形山を結ぶ縦走20kmの山歩きが楽しめる。また千ヶ峰山麓一帯は雨乞い岩や塔の石など、播磨国風土記に出てくる大人から生まれたあまんじょこにちなんだ伝説の地が今も残っており、大昔から庶民に親しまれた山であることを感じさせる。

51 | じゅかくぶんこ
壽岳文庫



加美区鳥羽
768-46
36-0080
杉原紙の里
休館日、
水・年末年始

昭和15年に杉原谷村を訪れ、この地が杉原紙発祥の地であると実証された壽岳文章博士の長女、章子(元杉原紙研究所名誉館長)氏から寄贈された文章博士の蔵書を展示している。また文章博士の影響を受け、30年の歳月をかけ「杉原紙 播磨の紙の歴史」を発売された郷土史家藤田貞雄氏の遺稿も展示している。2階はギャラリーとなっており企画展が随時開催されている。また平成14年に同じ敷地内に杉原紙とその製品を販売する「でんでん」が開設され、杉原紙を大切に思うボランティアによって、杉原紙を使った様々な作品が展示・販売されている。

52 | すぎはらがみけんきゅうしょ
杉原紙研究所



加美区鳥羽
768-46
36-0080
杉原紙の里
休館日、
水・年末年始

兵庫県的重要無形文化財・伝統的工芸品に指定されている、杉原紙は100%手すき和紙。そのはじまりは、古代にさかのぼると考えられる和紙で、漂白剤を使わずに自然の白さと温かみのある美しい紙肌が魅力である。時代の流れとともにいったんは途絶えていたが、古い歴史と伝統を誇るこの紙を復活再現しようと、昭和47年杉原紙研究所を設立し、昔どおりの技法での紙漉が復活した。館内は自由に見学でき和紙づくりのさまざまな工程を間近で見ることが出来る。研究所の前を流れる杉原川での「川さらし」作業は真冬の風物詩となっている。前もって申し込みれば紙漉き体験もできる。

55 | まつ い みず
松か井の水



松か井の水

室町時代末期、播磨の国を治めていた赤松義村が定めた「播磨十水」の一つである。印南郡平津村の医師平野脩が宝暦12年(1762)に完成させた播磨の地誌「播磨鑑」によると「多可郡名所舊跡並に和歌」の欄に「落葉の清水 松か井 松か井荘播磨十水の内也」として松か井の水が紹介されている。「末久に枝も葉かへす常盤成 松の落葉の清水涼しき」長い年月の間には所在不明になった時もあったが、昭和63年周辺の環境整備により、30年ぶりによみがえった。

56 | しんまつ い みず
新松か井の水



新松か井の水

一方、新松か井の水は平成13年、高坂トンネル工事の際見つかった湧水を駐車場付きの小公園として整備され、1日30tの水が湧出している。「松か井の水」、「新松か井の水」共に、今も県内外から多くの人が名水を汲みに訪れている。また、平成20年には、環境省選定の「平成の名水百選」に認定されている。

播磨十水

播磨十水は、赤松義村が定めた播磨国内の清水(湧き水)。「播磨鑑」に「赤松義村ノ定置れし所」との記述や、「播磨名所巡覧図会」に赤松則房の記述がある。

桜井清水	落葉の清水	野中清水	御所清水	小幡清水	篠田清水	岡田清水	小野清水
水	水	水	水	水	水	水	水

現在の松か井の水

多可町の鉱山 - 丹治の地名由来 -

多可町は生野鉱床帯に連なっており、かつては多くの鉱山があった。加美区丹治には、鉱山にまつわる伝承が残っている。あるとき、杉原谷の村に見慣れぬ男がやってきて、山から山へと歩き回ったという。まるで鳥のような身軽さで、人々は「天狗だ」と恐れたそうだ。その男はあちこちの岩を削って印を付けて回っていたが、いつのまにか姿を消してしまった。人々が安堵してから1年余りたったとき、はるばる和泉の国から数十人もの鉱山師たちがやって来る。そして、「天狗」と恐れられた男が付けた印を目印に、杉原庄、松井庄をはじめ丹波に至る広い地域で鉱山を切り開いていった。そのとき開発されたのが、久留寿銅山などだとか。この鉱山師の一族が「丹治」という名だったため、彼らが住んだ村もその名で呼ばれるようになったと伝えられている。

加美区多田にあった久留寿鉱山は、享保18年(1733)の開坑とされる。棚釜にあった勝浦鉱山は寛延元年(1748)開坑で、字「鍛冶田」から平安後期の建物跡が出たそうだ。古い歴史があるのだろう。また、宝暦2年(1752)に開坑した観音寺の樺坂銅山は生野鉱山と関係が深く、大歳神社は生野から来た鉱山関係者が勧請したとされる。観音寺に鎮座する青倉神社という小社のそばには、涼しい風が吹き出す鉱山跡の穴が残されている。交通の要衝にあたり「市原千軒」とうたわれた市原にも鉱山があった。「吹屋ヶ谷」という地名は、杉原谷各地の鉱山から産した鉱石を製錬したことに由来するのではといわれている。千ヶ峰に連なる清水には、生野の人が試掘したという穴があったとか。



銅製錬所跡

まってきた名残だと伝えられている。

「播磨国風土記」の託賀郡賀美(かみ)里には、「荒田」の地名由来として、父親のわからぬ子を産んだ女神の話が載っている。女神は、父親を見つけるために「盟酒(うけいざけ)」を醸したそうだ。その酒を神々が集まった席で子どもに持たせると、子どもは天目一命にその酒を捧げ、この神が父親とわかったという。荒田神社近くの小丘には、「めひとつさん」と親しまれる天目一神社が祀られている。多可町には、製鉄の神として知られる天目一箇神を撰社に祭る神社が少なくない。

播磨学研究所研究員 埴岡真弓



天目一神社

多可町八千代区



八千代プラザ前に立つ「敬老の日」提唱の地の石碑

継承すべき精神「敬老の日」発祥の地

多可町は「敬老の日」発祥のまちでもある。高さ2mの石碑が現在も八千代プラザの玄関にあり、「敬老の日提唱の地」と彫り込まれている。

戦後の動乱期(昭和22年)、野間谷村(旧八千代町)の門脇政夫村長が、全国で初めて村主催の敬老会を開催した。長い間社会に貢献してきたお年寄りに敬意を表するとともに、知識や人生経験を伝授してもらおう場を設けることを目的に、期日は農閑期で気候的にも過ごしやすい9月15日とされた。

昭和23年に「国民の祝日に関する法律」が施行されたが、こどもの日、成人の日はあるものの、敬老の日はなかった。そこで門脇村長は2回目の敬老会で、9月15日を「としよりの日」と定め、村独自の祝日にするを提唱した。その後さらに県や国に対して広く働きかけを続け、昭和41年に「敬老の日」は体育の日などとともに国民の祝日に加えられた。平成15年からハッピーマンデー制度の適用により、9月の第3月曜日となったが、その精神は受け継がれている。

敬老の日発祥の町を記念して行われる「おじいちゃんおばあちゃん児童画展」には、全国から多数の応募があり、おじいちゃん、おばあちゃんへの温かい思いがどの作品からも伝わってくる。

多可町では豊かな心を育む施策を充実させながら、先人の「敬老の精神」を受け継いでいく。

1

あんかいじ
安海寺

高野山真言宗

白雉年間(650年~655年)、法道仙人の開基で、行基菩薩によって堂塔が建立されたと伝えられる。その後、元禄年間に火災にあい、横屋村にあった安養院を合併して、元禄6年(1693)に再建された。本尊は阿弥陀如来坐像で像高は222.1cmもあり、いわゆる「丈六」(じょうろく)と呼ばれる非常に大きな像で、県指定文化財に指定されている。優しく柔和な面相で、衣の表



木造阿弥陀如来坐像

現も浅くなめらかに仕上げられており、平安時代後期の作風をよく残す。両脇に脇侍として安置されている薬師如来坐像、釈迦如来坐像も同じく平安時代後期の作と考えられている。また、木造恵弁坐像(もくそうえべんざう)



🏠 八千代区中村 220
📍 37-0328
📍 中村

も安置されている。恵弁は「日本書記」敏達天皇13年(584)の条に見える高麗(こま)の還俗僧で、仏教の師として慧聡(えそう)と供に、蘇我馬子と聖徳太子によって都へ招かれ、伝来期の仏教を支えられたとされる人物。中世播磨の地誌「峰相記」には、崇仏、排仏の確執のなかで、「播磨国安田の野間の楼」に幽閉されたとの記載がある。当寺の恵弁坐像は全体の作風からして平安時代の作と考えられている。絵画では南北朝時代の釈迦三尊十六善神像図(町指定文化財)をはじめ、多くの仏画が残されている。

2

かんのんどう
観音堂



観音堂

赤坂公民館に隣接する広場の中にあり、本尊の十一面観音ほか、毘沙門天、不動明王、弘法大師が祀られており、50年に一度開帳される。毎年8月には数珠くりが行われており、終了後は住民交流を図るため夏まつりが行われている。



石塔群

所蔵されている鯛口(わにぐち)には元禄12年(1699)の銘をもつ。また境内には六十六部廻国塔をはじめとする多くの石塔群が残されている。

🏠 八千代区赤坂
📍 赤坂

3

ごくらくじ
極楽寺

天台宗

伊勢和山極楽寺といい、白雉2年(651)、法道仙人により創建された竹谷山道脇寺が前身であり、後に寺宝「當麻曼荼羅図」という極楽浄土の様相を描いた絵図を有していることから、この地も弥陀の国であるということで、極楽寺と改称するようにと勅号が下り、現在の名称となったとされる。

南北朝の動乱期には、有田氏が裏手の野間山に野間山城を築き東播磨の拠点の一つとし、極楽寺も堂塔伽藍が薨をならべ勢力を誇った。寺宝「絹本着色六道絵」(国指定重要文化財)などの貴重な宝物類を所有するに至った背景には、大旦那として有田氏の存在が考えられる。明治8年(1875)には火災により本堂、鐘楼、経蔵などを焼失するが、現在本堂を再建中で平成26年(2014)完成予定である。

六道絵は仏教で説く善悪の業によって生まれ変わる死後の六つの世界の様相を描いたもので、大和絵風色彩が強く、その形式からみて14世紀はじめ(鎌倉時代)に製作されたと考えられている。その他「當麻曼荼羅図」「千手観音二十八部衆像図」「釈迦涅槃図」「竹谷山道脇寺往古伽藍之図」「伊



仁王門

勢和山中興図)などの多くの絵画が寺宝として残る。仁王門は国登録文化財で、建立は享保13年(1728)。正面の柱間が3間、中央間を通路とする2階建て、上層の四方には宝珠柱高欄つきの縁をめぐらす。



絹本着色六道絵

🏠 八千代区 中野間 210
📍 37-0214
📍 中野間

4

ようりゅうじ
楊柳寺



本堂



仁王門

天台宗

山号は柳山、白雉年間、法道仙人の開基とされる古刹で、法道仙人が千手観音の霊告により、山麓の柳の大木に自ら観音菩薩を刻み伽藍を造立し、その尊像を安置したという縁起が残されている。人々の帰依も厚く、七堂伽藍が立ち並び一大霊刹であったが、天正年間(1573~1592)、野間城落城の際に焼失したと伝えられており、その後、一部が再建された。本尊の観音菩薩立像や十一面観音菩薩立像など、平安時代前期~後期にかけての7体の仏像群が安置されており、すべて兵庫県指定文化財に指定されている。ま

た、5haを超える境内には、本堂をはじめ、仁王門、鐘楼堂、阿弥陀堂、奥之院、法寺院、薬王院などの堂宇が立ち並び、県の環境緑地保全地域にも指定されている。これらの堂のうち、本堂、仁王門は国の登録有形文化財に指定されている。当寺は、頭痛、手足の痛みの平癒を叶えてくださる「柳の観音さん」として、古来より播磨一円の参拝人がたくさん参詣され、現在は、法持院、薬王院の二院が年替わりで管理されている。法持院のしだれ桜は多可町随一の美しさを誇り、本堂や奥の院への参拝道は、新緑や紅葉など四季折々の景色が楽しめ、絶好の散策道になっている。

🏠 八千代区 大和 774
📍 法持院 38-0350
📍 薬王院 38-0300
📍 観音寺

秋祭り - リオンリオン・オトウ -

実りの秋を迎えた多可町では、あちこちでにぎやかな太鼓や鉦の音が響き、屋台や子供神輿が町や村を巡行するにぎやかな光景が展開する。中区安楽田に鎮座する荒田神社の獅子舞や、八千代区中野間に鎮座する貴船神社の「馬駈け」(流鏝馬)など、特色ある秋祭りも少なくない。



馬駈け

八千代区に鎮座する4つの貴船神社のひとつ、中村貴船神社の秋祭りには、「リオンリオン」と呼ばれる民俗芸能が受け継がれている。同社は旧天船村、坂本・中村・横屋・下村の4地区が氏子。伝承によれば、大昔この辺り一帯は沼地だったという。あるとき、猿田彦の神が、獅子を連れて天からこの地に降り立つ。神は開拓のために土地を測量、獅子は溝を掘り土地を耕し、人が住めるようになった。リオンリオンで、木の鉦を持った

天狗がまず拝殿前の地面に鉦で3本の線を引くのは神が測量の様子、天狗が太鼓の音と「リオンリオン」のかけ声に合わせて跳ねた後に獅子飛び跳ねるのは土地を耕す様子を表すと伝えられている。参拝者に振る舞われる枝豆を「獅子豆」と呼ぶのは、獅子が耕した耕地で最初に実った作物が豆だったことに由来するとか。「リオンリオン」は、宵宮には本社で、本宮にはお旅所の横屋・大歳神社で行われる。このとき、子供がササラ(木札を連ねたもの)を鳴らし、大人が布張りの太鼓を叩く「ゲイゲイ」も行われる。



リオンリオン

実は、リオンリオンは、平安時代末から鎌倉時代にかけて京都や奈良の大寺社の祭礼で行われていた、「王の舞」という芸能の系譜を引くものだ。大寺社の荘園を通して各地に広まり、播磨地方には「リュウオウマイ」「ジョマイ」「テング」などと呼ばれる王の舞の名残が残っている。中村・貴船神社のリオンリオンは素朴な形だが、平安貴族たちが楽しんだ芸能の香りを今に伝える貴重な芸能だ。「ゲイゲイ」もその源は「田楽(でんがく)」という中世の祭礼芸能で、獅子舞も古い形を残しているとされる。

また、八千代区柳山寺地区の氏神、大歳神社の秋祭りには、「テング(ハナタカ)」と「カグラ」と呼ばれる獅子舞が登場する。鉦を手にしたテングは人々が取り囲む広場を一周、3回鉦を揃い上げるようにして「わーっ」と叫びながら拝殿に駆け込む。その後、二人立ちの獅子舞が登場、テングと同じような所作を演じる。あっという間に終わってしまうが、やはり王の舞の系譜を引くものとして注目されている。身近な秋祭りの中にちりばめられた、中世文化の香りを偲んでいただきたい。

播磨学研究所研究員 埴岡真弓

5

あみだどう 阿弥陀堂

八千代区
大和 1484

中三原
(なごみの里
山部)



千鉢仏



阿弥陀堂

阿弥陀堂は、軒先に吊るされている梵鐘銘によると、「播州加西郡 中三原村 西山安明寺 阿弥陀堂・・・」と記されており、当初は安明寺という寺院の堂であったことが知られる。堂内には、本尊の阿弥陀如来坐像をはじめとする、平安時代後期から室町時代にかけての仏像群が安置されている。

八千代区

6

びしゃもんどう 毘沙門堂

八千代区
上三原

上三原上



武田信玄、上杉謙信一騎打の図絵馬



毘沙門堂

かつては西光寺毘沙門堂といい、本尊は毘沙門天。建物は江戸時代初期に火災に遭遇、現在の建物は元禄14年(1701)に再建された。般若十六善神画像(はんにゃじゅうろくぜんじんがぞう)は南北朝時代の作品で兵庫県指定重要文化財。図像は宋風の特徴を持ち、描線や彩色が巧みで、保存状態も良好である。現存する十六善神図としては、古いものに属し、現在は楊柳寺法持院で保管されている。江戸時代には、干魃になると鐘楼の鐘をカジヤ杉の奥の滝壺に投げ込んで雨乞いをし

たと言われていた。毘沙門堂の虫干しは毎年8月に行われ、大般若経600巻等の風通し等を行う。毘沙門堂の隣には真新しい大日堂が再建されている。また境内には樹齢150年の楠木などが景観保全樹木になっており、境内の2坪程の小さな池にはモリアオガエルが生息するなど自然豊かな森が残っている。毘沙門堂内には八千代区で最古の神馬図絵馬(安永9年:1780)をはじめ武田信玄、上杉謙信一騎打の図絵馬(安政3年:1856)など多くの本格的な大絵馬も奉納されている。

八千代区

7

かのこじんじゃ

鹿子神社



武者行列

創立年代は不詳であるが、はるか昔、少彦名命（すくなひこなのみこと）が笠形山頂から降臨されたと伝えられ、この近く、龍が淵の岩に馬蹄形の凹みがあるのは、乗馬して下山した跡だと言われている。その後延暦年間（8世紀末）に征夷大将軍坂上田村

麻呂がこの地に立ち寄り、村人6人の案内で播磨二宮（荒田神社）を参拝したという伝承も残されている。このため、この言い伝えに基づき、秋の祭礼時には6人の案内役を付けた武者行列が行われる。祭神も荒田神社と同じく少彦名命を祀っている。

拝殿から本殿に至る建物群は江戸時代末期の建

立と推定され、全体的に豪華で変化に富み、優美かつ重厚感をたたえている。境内神社として、金毘羅神社、広峯神社、皇太神宮社、山ノ神社、天満神社、稻荷神社も祀られている。拝殿に掲げられている絵馬も豊富で、「忠臣蔵芝居図」など、武家風俗作品を中心に31面を数える。



八千代区
大屋 626
大屋

10

こんびらじんじゃ

金毘羅神社

創立年代は不明であるが、地域の有力者が金毘羅神社の分霊を勧請したものと考えられている。「宗五郎一代記」の絵馬が奉納されている。秋になると境内の銀杏や紅葉が見事に色づく。

八千代区
下村
下村
(八千代診療所前)



11

しんめいじんじゃ

神明神社



八千代区
門田 106
門田

創立年代は不詳だが、近世の頃から太神社と言う社名で信仰され、明治42年（1909）に神明神社と改名し、現在に至っている。ご祭神は皇大神（すめおおかみ）と豊受大神（とようけのおおかみ）。

「皇大神宮＝内宮、豊受大神宮＝外宮」という祭神からも推察されるように、伊勢神宮をそのまま勧請した形をとっている。お伊勢参りの伝統がある地域なので、土地の篤志家達の手により、地域ぐるみでのような形で祀られるようになったと思われる。現在は境内社として金刀比羅神社（ご祭神：大己貴命）と地神社（ご祭神：國底立命）の2社も鎮座している。また拝殿には虎の絵馬が奉納されている。

8

きふねじんじゃ
貴船神社



八千代区
中村 207
中村

創立年代は不明だが、16世紀末に豊臣秀吉が陣太鼓を寄進したという言い伝えが残っている。延宝4年（1676）、本殿建立時の棟札があるので、歴史的にはこのあたりまでは明確に遡ることができる。

祭神は水喰尊、大歳神で境内社として山ノ神社、若宮神社、太神宮社、祇園神社も祀られている。かつて雨乞祭（雨乞踊）も行われていたが、昭和47年に一度復活した後、現在は行われていない。現在はこと御旅所（横屋の大歳神社）で行われる「リオンリオン」という民俗芸能が中世の伝統を残す貴重な祭礼行事となっている。

9

おおとしじんじゃ
大歳神社



リオンリオン

八千代区
横屋
横屋

中村の貴船神社の御旅所となる神社で、祭礼時には貴船神社を出発した行列がここに立ち寄り、中世芸能の伝統を色濃く残す、「リオンリオン」（天狗面を被った猿田彦の龍王の舞）、「神楽舞」（獅子舞）、「ゲイゲイ」（ささらという木札を鳴らしたり、布張りの太鼓を奏でる）という芸能が奉納される。これらの中世芸能は京都の文化を引き継いでいるものとされ、今に伝わるものとしては最西端に位置する貴重な無形文化財である。

12

だいじんぐうじゃ
太神宮社



八千代区
俵田 105
俵田

創立年代は不詳であるが、寛文9年（1669）建立の棟札が残されている。その後、社殿は宝暦7年（1757）に再建されている。祭神は豊受大神であり、地域では「伊勢大神宮社」の名で親しまれている。かつては雌雄二つの神楽で獅子舞を上げていたが、毀損して今は行われていない。境内神社として、秋葉神社、八坂神社、稻荷神社が祀られている。この地域の規模としては大きな長床や舞殿もあり、充実した建物群となっている。

13

かわしもじんじゃ
川下神社



八千代区
中野間
兵庫県信用組合前・花の宮(花の宮)

仕出原川、野間川、大和川が合流する三角点にあり、「かわっさん（かわっさはん）」と呼ばれ親しまれている。昔は拝殿もなく、今よりも少し大きい社殿があるのみであった。境内手前の川そばにある、岩を積み重ねた灯籠も、かつては川の中にあつたと伝わる。毎年、水の恩恵に感謝する夏祭りが賑やかに行われる。

14

きふねじんじゃ
貴船神社



流鏝馬

- 🏠 八千代区
中野間 1135
- 兵庫県信用
組合前・花
の宮(花の宮)

創立年代は不詳であるが、慶長年代の検地記録にも残っている古い歴史を持つ神社である。また、この鎮座地「花の宮」という地名は「播磨国風土記」にある花波神と関連しているものとされるが、祭神は高電神(たかおかみのかみ)である。
慶安元年(1648)本殿が再興され、寛政4年(1792)神門修理の時、本殿拝殿共に修補された。その後天保10年(1839)に社殿が再建された。

氏子3集落(中野間・下野間・仕出原)の青年達を作る注連縄は、大きなもので、彼ら自身の手作り作品となっている。また、近世の頃から、時の藩主の意向で流鏝馬(馬駆け)も行われ、現在も地元住民の力で矢を射る伝統行事が引き継がれている。これはその昔、土地の豪農が五穀成就の吉凶を弓矢の的にかけて試したという故事にならっているものとされている。また屋台の練り込みも勇壮に行われる。

15

てんまんじんじゃ
天満神社

創建は寛延3年(1750)と伝えられている。また祭神は菅原道真公である。4月25日に近い日曜日には春の天神祭が行われる。

- 🏠 八千代区
仕出原 386
- 山中(仕出原)



16

きふねじんじゃ
貴船神社



- 🏠 八千代区
下野間 356
- 本村(本村)

中野間の貴船神社と同様、かつては独自で流鏝馬(馬駆け)を行ってきっていたが、現在は中野間貴船神社祭礼時に一緒に奉納神事を行っている。中野間の貴船神社が9本の矢に対し、こちらでは10本の矢を射る習わしであった。境内社として、八王子神社、金刀比羅神社が鎮座し、一段高い所に稲荷神社を祀っている。

17

きふねじんじゃ
貴船神社



- 🏠 八千代区
下三原 390
- 下三原

天文10年(1541)、中野間の貴船神社から分社して祀られるようになったと伝えられる。祭神は高電神(たかおかみのかみ)宇気母智神(うけもちのかみ)の2神である。現在の社殿は江戸時代初期、寛文12年(1672)に淡路の大工により建てられた。
毎年元旦に行われる「雨散散(ゆうわらわら・うばらばら)」と言われる雨乞い神事は地域住民の手で今も引き継がれている伝統行事である。

18

あたごさんじんじゃ
愛宕山神社



ぼっぼこねんじゃ

- 🏠 八千代区
柳山寺
- 柳山寺

愛宕山と呼ばれる山中、徒歩で15分の急坂道を登ると2つの祠がある。
ここで毎年8月24日に行われている伝統行事「火の祈願祭」は「ぼっぼこねんじゃ」の呼び名で親しまれている。大勢の子ども達が松明を持って山を下りてくる姿は勇壮である。御神火を分けてもらい、仏壇や神棚に供えたと家内安全、無病息災、豊作などがかなえられると言われている。

19

おおとしじんじゃ
大歳神社



秋祭りのテング

- 🏠 八千代区
大和 733
- 柳山寺

創立は不確かではあるが、寛政8年(1796)の創建と伝えられている。祭神は大歳神、大歳命、建御雷神、譽田別命、天兒屋根命、菅原道真、表筒男命と多くの神様が合祀されている。境内社も多く、八幡社、宇賀太神社、八坂神社、稲荷神社の四社が鎮座している。毎年秋祭りには、龍王の舞が舞われ、賑やかに行われる。

20

おおとしじんじゃ
大歳神社



- 🏠 八千代区
大和 1670
- 中三原
(なごみの里山都)

創立年代は不詳であるが、残っている棟札から、寛永2年(1625)、本殿を再興し、寛文12年(1672)に拝殿を再興したことが知られる。現存する拝殿、本殿等は明治に入ってから建てられたものである。祭神は大歳命、大田命の2神で、境内社として若宮社、大神宮社が祀られている。秋には例祭が賑やかに行われる。

21

ちごいわ
稚児岩



- 八千代区
大屋
- 大屋

稚児岩

笠形山の中腹、六本地蔵から200mほど林道を進んだ山中に「稚児岩」と呼ばれる岩窟がある。聖徳太子等の仏教の師・恵便は排仏派の物部守屋に幽閉され、大屋地区の山中にある稚児岩に閉じ込められたという伝説が残っている。

22

ろっぽんじそう
六本地蔵



六本地蔵

- 八千代区
大屋
- 大屋

笠形山へと続く林道中腹の道沿いに小さな地蔵堂がある。ここには高さ40cm足らずの石に彫られた地蔵立像が祀られている。地蔵の様式から見ると江戸時代の作であると考えられている。「子授け地蔵」として御利益があると言われ、多くの人がお参りされる。

24

のまさんじょう
野間山城



野間山城入口



光竜寺山城から見た野間山城

- 八千代区
中野間・俵田
- 俵田 (八千代
プラザ)

標高約329m、平地との比高差約240mの山頂に広がる山城。くの字形の尾根筋上には、連郭状に曲輪が築かれ、中央の谷には大手道が築かれている。また、要所には堀切や石垣も残っている。こうした曲輪配置の平面形状は、あたかも鶴が両翼を広げているように見えることから、「鶴林城」とも言われていたようである。この山城は、曲輪の構造などから、南北朝期に築かれ、その後改修を経

ながら戦国末期まで使用された。戦国期には、眼下に見える光竜寺山城とともに、有(在)田氏の居城であったとされ、戦国末期には、別所氏の北播磨進出に伴い落城したと伝えられる。俵田にあるホテルの宿路南側から急な山道を徒歩約20分で城跡にたどり着く。

23

こうりゅうじさんじょう
光竜寺山城



光竜寺山城入口



城跡からの眺め

- 八千代区
中野間
- 俵田 (八千代
プラザ)

標高214mの通称「トンナ山」の山頂部を主郭とする、室町時代中期から戦国時代にかけて築かれた山城。西にそびえる野間山城とともに、戦国期には有(在)田氏が本拠を構えたと考えられている。6つの曲輪をもち、主郭は、北50m、東西24mの広さを持ち、二の丸跡とされる曲輪には、建物跡と思われる石列が残っているほか、土塁付堅堀など、4本の堅堀も備えている。

戦国末期には別所氏の北播磨進攻にともない、落城したと伝えられる。この城山を広く伝えるため、毎年5月に公民館周辺で城山まつりが開催され、当日は、16世紀の野間城下で行われた合戦の様子を描いた演劇や武者行列が開催される。エアレーベン八千代付近に入口があり、山城跡までは徒歩約20分、城跡からは八千代区南側の展望が開ける。

25

やくし
いぼ薬師



- 八千代区
中野間
- 山中 (八千代
プラザ)

八千代プラザ(地域局)の向かい、野間川沿いの県道の一角にうっそうとした森に、小さな祠がある。流れ出る清水が年中絶え間ないことから「清水薬師」とも呼ばれている。お供えしてあるホウキでイボをはき撫でてお願うとイボが治ると言われ、イボが治るとお礼に新しいホウキが供えられる。

26

いちいじゅうべい
市位重兵衛



大屋博多

- 八千代区
大屋
- 山中 (八千代
プラザ)
- 写真の大屋
博多は八千代
プラザ所蔵

北播磨地方での「博多織」創業者、市位重兵衛は絹糸商の家に生まれ、丹波糸を使って郷里で博多織ができないかと考え、小倉から一人、博多から三人の職人を招いて技術指導を仰いだ。しかし、当時博多織は、藩から將軍への献上品で、献上品としての希少価値を維持したい福岡藩は、藩士を派遣。三人の職人は連れ戻され入牢、獄死という結果を招いた。幸い大屋村は天領であったため重兵衛は難を逃れ、小倉からきた一人が残って職人を養成。大屋博多は、重兵衛が基礎を築き二代目、三代目にかけて全盛期をむかえた。重兵衛の功績は、播州織りに受け継がれている。

27

かどわきまさお
門脇政夫



- 八千代区 中野間
- 山中(八千代プラザ)
- 記念碑が八千代プラザにある

門脇政夫氏

昭和22年(1947)9月15日、当時の多可郡野間谷村(旧八千代町)村長だった門脇政夫は助役であった山本明とともに、長い間社会に貢献されてきたお年寄りに敬意を表すとともに、知識や人生経験を授けてもらう場を設けるために敬老会を開催し、同日を「としよりの日」に制定した。その後、全国に広がり、昭和41年(1966)敬老の日は体育の日などとともに国民の祝日に加えられた。平成22年(2010)年、98歳で亡くなったが、敬老の精神は地元八千代区をはじめ多可町に大切に受け継がれている。八千代プラザの玄関脇には高さ約2mの「敬老の日提唱の地」と記された記念碑が建立されている。

28

かさがたやま
笠形山



- 八千代区 大屋
- 大屋
- 頂上まで徒歩2時間

アカヤシオが咲く笠形山頂上

笠形山は、兵庫県神崎郡神河町と多可郡多可町との境に位置しており標高は939.4m。兵庫50山の一つで、千ヶ峰と共に、笠形山千ヶ峰県立自然公園になっている。その山容から別名「播磨富士」とも呼ばれている。木々の間を縫うように流れ落ちる、蛇腹滝、二重ヶ滝、竜ヶ滝、勝負ヶ滝、赤滝の5つの滝を望む竜ヶ滝登山コースがあり、頂上までは約2時間。新緑のころには頂上にツツジ科のアカヤシオが咲き、秋には木々の紅葉がすばらしい。あまんじゃこ伝説が伝わっており「天邪鬼の力水」「立岩」「天邪鬼の挽岩」などが現在も登山道沿いに残っている。

31

たけたにさん
竹谷山



- 八千代区 俵田
- 俵田

竹谷山の紅葉と石仏

かつてこの地には、竹谷山道徳寺という古刹があったが、今はその面影はなく、中野間の極楽寺がその法統を継いでいると伝えられる。現在は、多可十景及び兵庫観光百選のひとつに数えられ、春の桜、初夏の新緑、秋の紅葉など、奇岩や巨石が折り重なり、大小の滝が連なる美しい溪流が四季折々の姿で、風情豊かな自然美で迎えてくれる。大岩横の滝の上には不動明王が、その左上には白玉大名が祀られているほか、弘法大師堂が建立されている。溪流に沿って、八十八石仏群・西国三十三石仏群が立ち並び参道も整備されており行楽に格好の地となっている。

32

しゅくろ
ホタルの宿路



- 八千代区 俵田
- 俵田

ホタルの乱舞

多可町八千代区を流れる加古川の支流、野間川沿いは古くからゲンジボタルの生息地で、保護地域として整備されている。毎年6月初旬、夕暮後薄暗くなり始めると、無数のホタルが乱舞する。地元の方の協力により、ホタルの生息地は大切に守られ、ホタル祭りなども開催されている。またすぐ近くにあるフロイデン八千代は日本で初めての滞在型市民農園で、緑豊かな自然と心優しい地元住民とふれあい、農村文化の体験ができる。ドイツのクラインガルテンをモチーフにした赤い屋根のコテージが、緑の自然に映える。

29

ば つばき
化け椿



- 八千代区 坂本
- 坂本

ヤブツバキの古木で兵庫県郷土記念物に平成6年2月4日指定された。幹周り約2m、高さ約10m推定樹齢約500年県内最大のヤブツバキである。この椿は、昔から時季外れに開花することがある。また根本に中世期の合戦で討死した者を祀ったという五輪塔や石碑があり、夜にこの椿の前を通ると、椿が化けて出てくると言われたことからこのような名前と呼ばれるようになったと言われている。

30

こごりどうぶぎょうはっしょう ち
凍豆腐業発祥の地



- 八千代区 門田

播州凍豆腐興業組合検査証(昭和30年ごろ)

門田村の森脇定治郎(もりわきさだじろう)が高野山で、高野豆腐の製造法を研究し、嘉永5年(1852)、凍豆腐の製法を最初に導入したのが始まり。笠形おろしの冷たい風、雨が比較的少ない気候という自然条件や、交通網が開けていたことが大きな要因で発展した。昭和13年(1938)、多可・加西両郡の製造戸数は163戸にもなったが、暖冬異変で製造が難しくなったことや、人工冷凍工場の普及もあり、天然凍豆腐業は衰退し昭和33年には姿を消した。しかし、八千代区では高野豆腐を使った郷土料理が数多くあり、現在も大切に受け継がれている。

33

さいたにこうえん
西谷公園



西谷公園

西谷なごみの森は、かつて薪や炭の生産が行われ、里山林として人々に親しまれてきた森で、アカマツ林やアラカシ林、ツガ林、植林されたスギ・ヒノキの人工林が見られる。この里山の入口では、地元で「みそ岩」と呼ばれる流紋岩の岩場がみられ、ヒトツバヤシランなどの珍しい植物が観察できる。途中の展望からは、大和地区が、また遠方には地域のシンボル笠形山が望める。そして、谷筋のせせらぎ沿いには、ヤブツバキの群生地が広がり、背後にせり出す巨岩と相まって独特の風景が見られる。春には西谷公園さくら祭りも開催される。また公園北側には「大石良雄の石垣」



大石良雄の石垣

と呼ばれる石垣がある。元禄時代、旧大和村は赤穂藩の飛地領で、当時、赤穂藩は米の増産による安定した藩財政を確立するため、各地でため池などの灌漑工事を行った。この地の工事は、それらの中でも群を抜いた大規模なものであり、赤穂藩直轄の工事で当時の赤穂藩筆頭家老、大石内蔵助良雄が造らせたという伝承が残る。しかし、堤体を積み重ねる最後の工程の際、豪雨のため堤が決壊したと伝えられ、現在では、洪水吐の石垣と底樋管のトンネルを残すのみとなっている。近くには滞在型市民農園ブルーメン大和やなごみの里山都などの観光施設もある。

雨乞い

八千代区下三原の正月行事「雨散散(ゆうわらわら・うばらばら)」には、その文字からも想像されるように雨にまつわる由来が伝わっている。天明年間(1781～1789年)に大干ばつがあり、貴船神社の摂社、八幡神社に雨乞い祈願したのが始まりという。山の上で薪などを燃やす千駄焚きなど、かつては多可町域でもさまざまな雨乞いが行われていた。



雨散散



馬の足跡

八千代区大屋から笠形山への登り口にある竜ヶ滝には、こんな伝説がある。昔、スクナヒコナの神が、野間川の上流にあたるこの地を開くためにやって来た。この神を祀ったのが、大屋の氏神、鹿子神社と伝えられるが、あるときスクナヒコナは開拓した土地の様子を見ようと馬に乗って笠形山に登っていったという。竜ヶ滝の岩には、その馬のひづめ跡だという窪みがあるとか。さて、この滝で休んだスクナヒコナの神は、苦しんでいる子へびを助けてやったそうだ。すると、小へびは水神である竜となって昇天した。それ以来、竜ヶ滝でお供えをし、火を焚き、お経を読んで「スクナヒコナの子孫だ」と告げると、必ず雨が降ったと伝えられる。

加美区岩座神の七不思議のひとつ、千ヶ峰の雨乞い岩には、雷神の馬のひづめ跡が残っているという。この岩に蓑をかぶせて雨乞いしたとされ、それは雷神の機嫌を取るため娘たちが踊りを踊った故事にちなむ儀礼だったとか。実際に雨乞い踊りが行われていた記録が残っているのは、八千代区の旧天船4ヶ村だ。坂本・中村・横屋・下村の4地区は、ひどい日照りに見舞われると、貴船神社や安海寺で「百石踊」「千石踊」ともいわれる雨乞い踊りを奉納した。江戸時代の踊りの唄本も残っており、戦前までは何度か行われていた。昭和47年に天船の雨乞い踊りの復元が行われ、貴重な映像記録が残されている。古風な音頭に合せて、女装し花笠を被った少年らが輪になって踊っており、その形態は県の無形文化財に指定されている駒宇佐八幡神社(三田市)の百石踊りなどとよく似ている。

また、八千代区上三原の毘沙門堂では、かつて鐘を滝壺に沈めて雨乞い祈願したとか。滝壺に汚物を入れて龍神を怒らせ、雨を降らせる方法は各地で見られるが、上三原の雨乞いも同じ意味を持つ儀礼のようだ。水神である竜やへびは金物を嫌うという。農耕に不可欠な水、「秋の世の中のように雨乞い踊りをひと踊り」という天船の雨乞い踊りの唄の文句からは、旱天に慈雨を乞う昔の人々の気持ちが痛いほど伝ってくるようだ。



昭和47年の雨乞い踊り様子

播磨学研究所研究員 埴岡真弓



多可町歴史街道推進協議会

〒679-1192 兵庫県多可郡多可町中区中村町123

多可町役場

TEL 0795-32-2380/FAX 0795-32-2349

多可ふれあいボランティアガイド

〒679-1105 兵庫県多可郡多可町中区東山539-3

那珂ふれあい館

TEL 0795-32-0685/FAX 0795-30-2730



歴史街道
HISTORICAL STREET